
とある直死の永久機関（エターナル）

トライ・ブレイク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある直死の永久機関^{エターナル}

【Nコード】

N4675J

【作者名】

トライ・ブレイク

【あらすじ】

時空を超える現象。終わらない無限の殺戮。歪む瓦礫の世界。学園都市では能力者連続殺人事件が起こり始めていた。万物の綻びを視ることができる少年。異能の力を打ち消せる能力の少年。輪廻の転生者、永久機関^{エターナル}。全てが交差する時、物語は始まる……。。

シキ

ふと、目が覚めた。

ここは何処だろう？　ここで何をしてたんだろう？
よく、覚えてない。

とりあえず、動かないと…。

あれ…？

動け…ない？

なんだ、これ？

コード？

何で体にこんな物が——？

ガタッ！

隣に、なんかいる。

カプセル？

いや中に、ヒトがいる？

(笑ってる?)

君は・・誰? (…ツテル)

僕は・・何? (…シツテル)

僕は、知ってる? (…ソウダ)

何を、知ってる? (…スベテヲ)

何で、君は笑ってる? (…ソレハ…)

『ズキッ!』

ダメだ。

頭が痛い。

割れそうだ。

くそっ。

痛てえよ…!

「――、――」?

声が、聞こえる。

誰か、来た、のか…？
なんか、喋ってる…。

「――態はどうだ？」

「良好で――。問題あ――せんが、ただもう1人の――
――は使えません」

よく、聞き取れない…。
ノイズ雑音が、走る。

――アタマが、イタイ――。

「残念――れはもう――回路が狂って――
――に切り替えるしか――」

「――やはり、これも失敗作――」

シッパイサク？
――なん、だ？

そ、れ？

ウッ！！

く、そッ！

イキが、くるし、い…！

何なんだ。

何が、起きてる。

何が、どうした。

誰か、答えろ。

誰でも、いいから。

ここは、どこだ。

何を、した。

オレに、何を。

——なんなんだ——。

——答えろ——。

——オレは——。

もう、ナニモカモ、ワカラナイ……。

ナンデ…？
ナンデ…？
ナン、デ…？

———キミハワラッテイルノ———？

成功例

ここは学園都市、”ガラスの要塞”と呼ばれる世界最硬のビル。
広大な場所の中にモニターやボタンなどの大量の機械類が散乱している空間。その中でも最深部にあたる最高機密^{トップシークレット}の部屋が、私の家。

いつからだろう。

外界への夢を抱き始めたのは。

時刻どころか日付すらわからないいわば時空論のない三次元空間の中、いつしか頭のどこかでガタがきてしまっていたのかもしれない。何かが違っているのだけど、何も違っちゃいない。何か間違えているのだけど、何一つ間違っちゃいない。正も負に変わる。生も、死も。

矛盾が秩序化されている。

ここはそういう世界。

くだらない夢想に縛られているのは、たぶんそのせいだろう。
外の世界の事はよく知らない。

知っている事は、『3つ』。

それは自分がヒトではないということ。

なんでも、魔術師エドワード・なんとらとかいうやつが書いた「法の書」と呼ばれる魔導書の力で、私は生まれたらしい。

そんなこと、私にとってはどうでもいいが。

自分の生い立ちなど知るだけ無駄とアレイスターが言っていた事があったが、全くもってその通りだと思う。少し癪だが。

もう1つは、私が「成功例」だということ。

過去に自分以外の「失敗作」が処分されていたのを私は知っている。

しかし心は痛まなかった。

あいにくだが、同情出来るだけの心の許容範囲なんてないのだから。

最後は、私はただの モルモット 実験体という存在でしかないということ。

人から大きく逸脱したこの存在がただの マッドサイエンティスト 実験体 なのだ。

アレイスターはよほどの奇人変人的科学者なのだろう。

しかし、アレイスター。

君には莫大な借りがあることを忘れてはいないか？

君がくれた何物にも変えられないこの世に二つとない唯一無二の贈り物。

そう。

生だ。

生まれてくる事が無ければ、喜びも苦しみも痛みも知ることには無かった。

永遠に感情の無いまま。

永遠という苦しみを知らないまま。

私は生き続けていただろう。

それを生きているというのだろうか。

きっとそうは形容出来ない。

言うなれば、死んでいる。

死に続けている、と言った方が、或いは正解かもしれない。
私は死に続けていたのだ。

そこに君が生を与えた。

生きる事を教えてくれた。

景色が一変したよ。

視界が反転したよ。

死に続けていた私が変わった瞬間だった。

そして、この私に生きる意味すらも与えてくれたのだよ。

君が私にくれた最初にして最後のモノは、皮肉にも私にとって必要不可欠なモノだったのだ。

それが、『借り』、だ。

多分それは、私の永遠を懸けても支払う事は敵わないだろう。

だからといって、私の永遠を君に捧げよう等とは思っていない。

心配は無用だ。

君は私に多大な生をくれた。

ならばこれはその感謝の気持ちだと思ってくれ。

言うならば、御礼、あたりが妥当か。

——アレイスター。

君は何を望む？

世界か？

永遠か？

全てか？

——私には君の考えを汲み取ることなど出来るはずもないだろうな。及ぶ訳がない。

どちらにしても、現時点で私は私で与えられる最高の贈り物を用意するつもりだ。

期待はいらない。

ただ必要なのは——覚悟だけだ。

さあ始めようか、アレイスター。

数多に輪廻する永遠を断ち、不動の生命をもってして、ここに君の死を誘おう——。

上条当麻

「えーい！ちくしょー、何でオレばかり！！？　不幸だー！！！」

上条当麻は例の如く、元気に不幸だー不幸だーと大音響で叫びつつ、もはや十八番になってしまった大絶賛爆走中！！　を繰り広げている。

簡単に言うのと遅刻しそうなのである。

「あはは、結局こうなるんですね。分かってましたよ、上条さんにはちゃあーんと分かってましたよ、こんちくしょー！！！！」

何があったかと言うと。

とある事情でバスタブで日々のほとんどを過ごしている上条は当然、寝る場所もバスタブな訳で。

なんか、朝起きたら隣にインデックス（上条家の食費泥棒）が横で寝ていて。

そして、なんか、衣服が若干みだれていて。

そして、なんか、上条と一緒に起きてしまった。

そして、なんか、自分のほうと上条のほうを見比べて。

そして、なんか、修羅が誕生してしまったのである。

「…とーま。なんで私がとーまの寝床にいるのか説明してほしーかも」

「……いやいや！ それは完全なる不可抗力であってワタクシは何もあなた様が考えてるようなエロティックな方向にいったないのでありましてっーか青髪じゃあるまいしおまえのロリボディになんかに興味ねーし……「ブチッ」あれっ！？　なんでここでキレるっ！？　キレるタイミングが100パーセント違うのではッッ！！？」

「……とーま、最後に言いたいことがあるなら今の内にいっておくんだよ。」

「ワタクシには名誉挽回にチャンスすらあたえられないのか……！！？」
あと、バスタブの中に入ってきたのはおまえだ……！！！」

そういう訳で命からがら、修羅の魔の手からの逃亡に成功したのだが、時間をよく見るともうバスの時間はとくに過ぎていた。

（……あれは完璧なる事故だ！　何故に上条さんが被害を受けねばならぬ！？　おのれ、神！　貴様までオレの敵になりやがったな……！！）

味方だったことは1度もありません、と神様はツツコンでくれたと思う。

たぶん。

……上条はまだ知らない。自分の時計が壊れていることを。

そして、ここは学園都市にある普通すぎるくらい超一般的な平凡高校。

そこにある教室で、ある学生による絶叫合唱が響き渡っていた。

「ぐはっ！　ぐ、ぐるじい！　せ、先生！！　す、少しくらい、話を……（ゴキッ）が、ガハッ！！！」

「黙れっ、上条当麻！！　貴様は常日頃から女子に声を掛けまくり、あらぬことか好意を寄せられ、挙句の果てには学校中の女子が……、女子がっ……じょしがあぁっ……！！！！！！！！！！」

「なんて理不尽な！！　くそう！　オレは一生不幸なままなのかー
ー！！！！　ちなみに災誤先生はロリコンじゃないからねー！！！！！！！！！！」

一方、そのころ上条の教室では、

土御門「青髪、カミやんがまた先生にやられてるらしいにゃー」

青ピ「まうたですか？　ホンマにカミやんは先生のこと好きなん
とちゃうのん？」

土御門「そりゃないぜよ、なんてったってカミやんの嗜好は管理人
のお姉さんタイプのエロエロボディあんだからにゃー」

青ピ「えっ！？　そうやったん！？　この前、カミやんがすんば
らしいロリボディの銀髪碧眼えいごぺらぺらうそうな女の子とた

のしそーにシヨッピングしてたから、てっきりボクらの同志になったんかと…」

学生A「何だつつツツ!? また上条が!? あんの旗男がつ!!」

学生B「えっ、それって常盤台のお嬢様のことじゃないの?」

土御門「ここだけの話、両方ほんとのことらしいにゃー」

吹寄「…その話詳しく聞かせてもらおうか…」

姫神「…上条君。私は既に。眼中にないのね…。」

学生C「それならあたしも見たことある。なんか上条君えらく鼻の下のばしてた」

青ピ「……、分かつたけど、カミヤん浸食率がこれほどの物やったとは……! なるほど、今世紀最大の課題はカミヤんの超絶旗回収スキルやったんやね……。カミヤん殺す」

土御門「まあまあ、我々の同志にこれだけの女たらしが入ったと思えば、軽いもんだと思わんかにゃ?」

学生D「そういえば、土御門の妹にも…(ガタツ)」「カミヤん、覚悟するぜよツツツ!!!」ひ、ひいっ、顔がマジでこわい!!」

学生A「あ、思い出した! 青ピ、おまえが狙ってた少女と上条がこのまえ仲良くお話してたぞ」

青ピ「…質問ですが、カミヤんをガチで★ブツコロ★していいで

すか？」

吹寄 「死体処理なら任せなさいッ。手を抜いたり、同情したりしたら死を意味することを忘れるな!!」

姫神 「上条君。骨のことなら。私が拾ってあげるから。」

土御門 「皆の者! いま!! 我々、人類は破滅しようとしているッ! 我々の人類の絶望の塊、カミヤンによってだ!!」

吹寄 「立ち上がるのよッ! みんな!! あんなやつにこの世界を渡してはいけないッ!!」

青ピ 「勝って勝利の至福をあじわうんやーッッッ!!」

上条ズクラスメート 「「「「うおおおおおおああー」」」」!!」

なんか大変なことになっていた。

その後、上条はこの世で最も美しいとされる川を渡りかけたのは、
いうまでもない。

出会い

上条当麻はゲッソリとした顔で町を歩いていた。

今日び始まった訳ではないが、今週の不幸ランキングで1位が取れそうなくらい今日の不幸はひどかった。

ふらふらとする足を、渾身の力を振り絞りやつのことで立っていられるかんじな状態なのである。

「はー。帰ったら夕飯つくんなきやいけねえし。めんどいけど何か買ってかえるか…ん？ あれ？ サ、サイフが、ない……………」

訂正。

今週ではなく今月の不幸ランキング1位になった。

上条は切実に思った。不幸だ、と。

サイフがないという事実を受け入れられなくて現実逃避展開中の上条の背中に何かあたった感触があった。

振り返るとそこには今1番会いたくないやつ、御坂美琴が上条をつっついていた。（上条はこの世のものとは思えない顔をしていた）

「ちょっと、あんた、今ヒマ？ ヒマなら少し付き合ってほしいんだけど…」

「…ただいま上条さんは目の前のビリビリの姿が分からないあるいは存在すら忘れてしまうほど正常に頭が働いていません。話しかけたい場合は、真後ろに振り返って10秒くらい数えてください。そうしない場合は上条さんの頭にニョキニョキ角が生えてきますので

「ご注意ください」

「なんか、明らかに私を拒絶してんのが全身から伝わってんだけど！」

「早くしないと上条さんが今世紀初の女神転生ならぬ真鬼転生をしてしまいますよ？ それでもいいんですか？」

美琴は上条のまもっているドス黒いオーラに気おされてしぶしぶ従った。反抗したら後が怖いと思ったのは言うまでもない。

「（何よアイツ！ 人がせっかく勇気振り絞って声かけたってのに出会いがしらに存在すらわすれてしまうってどういう神経してんのよ！ だいたい何よ真鬼転生って！ 意味わかんない！）」

美琴は上条にそういう感情をいदैており、上条はやっぱりそれには気付いてないので自分からアタックしにきたのであった。青春してます。

「……………」

「ちょっと！ 何か喋ったらどうなの！」

「……………」

「気まずいじゃない！ 普通こういう時は会話くらいするもんじゃないの！」

「（ブチッ）そうかそういうことかアンタは私と喋りたくもないってかそういうことなら私にだって考えが—————」

そこに上条の姿はなかった。というか痕跡すら残されていなかった。

実をいうと、10秒くらい待てというのは逃げるための口実だったりして最初から逃げる気マンマンだったのはトップシークレット。いまさら気付いたって後の祭りだった美琴だった。

「……………空しい……………（グスツ）……………」

美琴が見事撃沈してしまつてヘコんでいるその一方で上条はとうと他人から見たらドン引きされるような必死な形相で後ろを見ずに（見たら死ぬ）全脚力のフルマックスを超えて光速の世界に突入している最中である。

「（くそっ、あせっちゃ駄目だ冷静になるんだ、オレ!!!）」

そう自分に言い聞かせるが、それでも足のガクガクは止まらない。

「（はぁ〜とりあえず逃げてきたけど後で絶対美琴にフルボッコされるに決まつてるよ…。うっうっ、不幸だー!!!）」

本日3回目の心の底からの叫びでした。

というか最後のは完璧自業自得だということは上条が知ることはないのであった。

美琴と話していた場所からずいぶんと離れたところまできた。もう後ろを見ても大丈夫だよな、と振り返った瞬間、

前方にあった不良達の集まりの中に突っ込んでしまった。

詳しく説明すると、その集まりの中でカツアゲされそうになっていた

メガネの少年とキス直前までいってしまい、

「…ぬおおおおお！ ファーストキスだけは渡さねー！！」

「……。こっちだって御免だああああ！！」

頭と頭をぶつけた。だが一瞬だけ上条の唇がメガネの少年のほおに触れ、結果的には上条がメガネの少年にダイレクトキスするような形になっていた。

「…んんんー！？ げほっげほっ、うえええーゲロゲロゲエえ。お、オレの天使の唇が、うばわれてしまった！？」

「ぬおおおおおー！！（ゴシゴシゴシッイ） オレのほおはまだ無垢なままなんだあああああ！！」

ものすごい速度で自分のほおをハンカチで拭いているメガネが1名。

それと、何故かどこから持ってきたか分からない殺菌作用のある液体まで使っていた。

「…そこまで嫌がられるときすがの上条さんもそろそろブチッっていってしまいそうなんですが！！」

「なんでだ！　なんでこのオレが男にキスされねばならないんだ！
！？　しかもこんなウニ頭でパツとしない奴なんかに！！？」

「OKOK。それは戦闘準備完了という意味で受け取ってよろしい
んですね？　今日の上条さんはバイオレンスを通りこしてパーフェ
クトブッコロす状態なんですよ？」

ちなみに周りにいた不良達は啞然といていましたとさ。

「・・・ちょ、テメェら！　なめてんじゃ」・・・まずは邪魔者から
殺つとくか」「そういや元々こいつらのせいでだったんだよなあ」
……………お手柔らかに、ってぎゃあああああああああ！！」

それ以来この場所は、誰もいないのに叫び声が聞こえてくるとい
う都市伝説として恐れられるようになったのだとか。

行間 変動する景色

ある男の話。

その男は学園都市の第2学区を、まるで何かから逃げないように駆けていた。

そしてその何かに怯えるように。

人にぶつかろうがゴミ箱にがぶつかろうがコケたってそんな事ものともせず、

ただ怯えて、ただ必死に、逃げるように……。

男は逃げて、逃げて、逃げて。

いつしか人気のない路地裏に来ていた。

もうすぐだ、もうすぐ、ここを抜ければ、オレは助かるんだ、と。

そんなかすかな希望を抱きながら、男は路地裏を抜けた。

瞬間、

前方の空間が歪んだ。

「————え？」

歪んだ空間の中に腕が入っていた。

その腕は、切られた訳ではなく折られた訳ではなく。

「ああ、あああ、ああああ！　腕が…！　オレのっ、オレのッ……
！」

なくなっていた。

もともとこの世界になかったように……。

あるのは、腕の切断面から流れる赤い液体だけ。

コツコツ、と。

革靴の独特な足音が聞こえた。

「……う、うわあああああああああああああああああ
！！」

訳が分からなかった。

どうしようもなかった。

ただ、逃げたかった。

目の前に広がる恐怖から。

目を逸らしたかった。

目に映るこの憎悪から。

だから、気付いた時にはもうやってしまっていた。

どうしようもなかったのだ。

そうして、歪んだ空間に足を入れてしまっていた。

既に足は消えていた。

「がああああああ！ ……ひっひっ…う、あ……ああああああ
……」

ドクドクと、赤い液体が流れる。

足を引きずり片腕だけでなおも逃げようとする男。

それを嘲笑うかのように、目の前に誰かが現れた。

「……ば、化け物め……よ、よるなああああ！！」

『それ』は、真っ直ぐに腕を伸ばし、手のひらを開き、

そして、告げた。

「いいね、最高の褒め言葉だ」

手のひらをグッと閉めた。

刹那。

全てが、終わった。

そこにあったのはバラバラになったただの肉片の塊と、血溜まりのみ。

それはその血液をなめ、恍惚な表情を浮かべ、暗闇に消えていった。

行間 変動する景色

男が殺された路地裏。

そこにユラユラと蠢く影が4つ。

「あーあー？つたく、リーダーはどうしてこう後始末をしねえんだろーな？」

電灯にあたってきらめく銀髪に、耳に大量のピアスをつけた17歳くらい少年。

「じ・つ・は、ああ見えて意外と内気なメガネツ娘キャラだったりして★」

くりくりとした緑色の瞳に、帰国子女を思わせるような金髪の14歳が妥当な少女。

「……………」

何もかもが黒で統一されていて、見えていて虚無感を与える20歳過ぎの男。

「……この行動には価値や意味が存在しない。よってこの不可解な行動の根拠は自分の殺人衝動に任せたただの暇つぶしであることが推察される」

冷徹な瞳に、全てを飲み込む黒髪、妙な喋り方で現状を説明している学生。

「っはゝ。めんどくせー、ちゃっちゃつと終わらすか！」

銀髪の腕が伸ばされ、あたりの空気がいつきに冷めていく。

伸ばされた腕をゆっくりと振り下ろした瞬間、そこにあったはずの赤い液体が固まって空中に浮いた。そしてそのまま下に叩きつかれ

バラバラに砕け散る。

「うわっひゃ!! 氷河、何すんのよ!! 至少くらい丁寧に処理しろっての!!」

「あー、うぜえ。ならおまえが処理しろ」

「うぐっ、それを言われると反論できない…!」

銀髪と金髪の言い争い。静かな第2学区にぎゃあぎゃあと喚く声が遠くまで響く。

「――――次の仕事が入った――――」

男が告げる。

「はあ、リーダーは仕事のシフトが早いこと早いこと。まったく、後始末する身にもなってほしいところだわ」

「じゃあおめーが殺る側になるか？ オレはそっちのがいいけど」

「はあぁー。あんたはまずそのオカシイ思考回路を治すのを優先しやがれ。まあその時が来たら、私だってただで返すつもりはない。殺るのは嫌だけど、血は好きだから」

「現在23時5分前、仕事開始まであと1時間弱」

「っと。じゃあ行きますか。楽しい戦場へ」

「今度はリーダーに盗られねえよーに、さっさと殺るかな。ああ、ヤベー、ゾクゾクしやがる。震えが止まらねえや」

「――行くぞ――」

四者、様々な願望を胸に抱き、そして向かう。

血みどろで薄汚い殺し合いへ。

この組織の目的はただ1つ。

学園都市統括理事長、アレイスター・クロウリーの末梢。

組織に名は、

「ロンギヌス」

七夜志貴

秋空の中で小萌先生のチョークの音だけが響く教室。ある野郎は爆睡中であつたり、早弁していたり。

している以外はごく普通の授業風景である。そんな中、上条当麻は学校の窓からぼくと空を眺め続けて、ため息ばかりついている。

「――ですから能力は、このようにするとパーソナルリアリティがより確立しやすくなり、自分の潜在能力に気付く……って上条ちゃん！ 聞いてましたですかっ！」

「あゝ。聞きます聞きました聞いてます聞いてました、三段活用＋a付き」

「上条ちゃん？ 最後のなんですか聞いてましたって。過去進行形じゃないですか？」

「あゝあゝ。あれですよ、あれ。言葉のあやとか言うの」

上条は小萌先生の注意をてきとーに流していく。小萌先生はムキになってしまい上条の言葉にさらに食いついてくる。

「だいたい上条ちゃんは入学当時から授業態度がどん底なまでに最悪なのですよ。おまけに、イベントがあるごとに変態お祭り野郎に変身する癖があるし。そんなパワーがあるならそのお祭りパワーを授業にも使ってほしいのです！ ほかにあんなことやこんなことが……（以下省略）」

曰く小萌先生の伝説的恒例行事であるところの布教文句、つまり

説教が始まってしまったのである。ついさっきまで気だるそうにしていた他の生徒達はみな小さいガツポーズを上条に向け、皆口々に隣の子とおしゃべりしたりトランプをしだしたり、遊びだしてしまった。

上条は、はーはーとさっきよりも長く深いため息をつく。

上条は別段昨日のことでもものすごく落ち込んでいるわけではない。普通の人なら、クラスメートにたこなぐりにされて帰りにいきなり熱烈なキッス（男に）をもらってその場の勢いで不良7人くらい相手にケンカをしてボコボコに返り討ちにあってしまったら、次の日は絶対に落ち込む。

だが上条はこんなこと、日常茶飯事なのである。本人もうすうす気付いているが、自分はとても不幸であり、他人はこんなことが日常茶飯事に起こっていない。

否、起こっているはずがない。

直したいと思ってもこれはどうにもならないことで、本人は既に諦めてしまってる。よって上条は昨日のことは考えてないことになる。

上条の悩んでいる訳は、今日の時間割り（カリキュラム）に能力判定が含まれているからである。

上条の右手には幻想殺し（イマジンブレイカー）という特殊な能力があるが、それは能力判定では無能力者（レベル0）扱いになっているらしい。

記憶をなくす以前、上条は必死に幻想殺しについての弁解を試み少しでも能力値を上げようとがんばっていたことがあるが、空しくも惨敗に終わってしまったらしい。

他人との壁。

越えられない絶対的な壁。

がむしゃらにやっただって上がらない能力値。

そんなことに虚無感を感じる。

もう、上がらないんじゃないかなとか、学園都市に來た意味ないなーとかときどきナイーブになってしまう。

だから今日の上条はちよつと憂鬱なのである。

説教聴き流しながら、ぼんやりと空を見続ける。

そうこうしている内に、授業が終わった。授業が終わっても小萌先生の説教をくらっていた上条はドツと疲れが出てすぐさま机に突っ伏して寝てしまった。

怒った小萌先生は

「上条ちゃん？ 今日という今日はコロンブスの卵が出来るまで残ってもらいますからね？」

と刑法38条の刑罰に則った刑に処した。

「……………。ふこーだー（棒読み）」

あまり気にしない上条。

「もうっ！ 上条ちゃんったら！ あ、そういえば今日転校生が来るんです。先生は転校生ちゃんを迎えにいかねければならないので今日はこれくらいにしないとあげるです。上条ちゃん？ だからといって説教を免れようとは思わないでくださいですよ？」

転校生という聞きなれないワードにクラスメート全員が反応した。

「転校生！？ この時期にくる転校生といえば……GOOD」

「も・ち・ろ・ん、可愛い超絶美少女なんやな……GOOD」

「もしかしたら、超絶美少年かも……GOOD」

「妹キャラをキボンヌだにゃ……GOOD」

原因は不明だが、何故かクラス中に……GOODが流行ってしまった。というか親指を立ててこっちを見ている。上条的には超絶ウザいの一言に尽きる。

転校生といえば1人思い浮かぶ上条。

「（まさかアイツじゃねえだろうな？ でもこれまでのパターンじや絶対にアイツしかいねえやうんそうだろうなあーあーこういうの何ていうだろアレだなアレしかねえやな、よっしゃ、せーのー）」

「不幸だ」

そして次の時間が始まり、やってきた転校生は案の定、上条の予感的中しやはり昨日のアイツだった。

「あ」

「あ」

分かっていたとは言え、本気と書いてマジと読むくらいの予想だったためやはり面食らってしまう上条。一方、教壇に立つ少年は、昨日のアホがまさか同じ学校でまさか同じ年齢でまさか同じ学年だったとは露知らず、こちらでも面食らっていた。

「なんで、君ここにいんの」

「それはこっちが聞きたい」

「転校生だから」

「うん、知ってる」

「ていうか君、ここの生徒」

「残念ながら」

「そうなんだ」

「そうなんです」

「……………」

「……………」

「……………」

二人とも哑然とし、お互いに言葉も発せられずただただ時が過ぎていった。

そしてある一人の少年が呟く。

「そういや昨日仲良く歩いてたな、上条と転校生。なに？ あんたらもうそんなに親しいの？ 羨ましいねこのこの。もしかしてもうアレな関係があったりして……………！ きゃー★」

……………。

うん。あとでこいつ、殺^やろう。

という訳で、对上条専用原子爆弾がいきなり投下。瞬間、クラスメートとの心の距離が一気に開いた、気がした。

「か、か、カミヤン…！ まさか、そっち系だったとは……………！」

「はい？ ま、待て誤解だ！ オレはこんなやつ見てないし知らないし声をかけた覚えもない！！」

「声をかけた？ …カミヤン、自ら墓穴をほっているんだけどにや」

「…カミヤン。大丈夫や安心せえ。ボク達は一生友達や…、たとえカミヤンがBLだったとしても！ 我らの友情は永遠なりッ！！」

「勝手に人の価値を見定めなくてクダサイッ！　だいたいテメエが優しいのは気持ち悪いんだよ！」

「…そうだったのか、カミヤん………それでも！　オレはカミヤんの味方で居続けるぜよ！！」

「そういういつも若干のこの距離は何なんですかッ！　あと腐ったもの見てるような眼でオレを見るなああああああああああ
あ」

青髪ピアスと土御門は全てを悟り、そのうえで上条を受け入れる覚悟らしい。だがそれなりの距離は保つらしい。

クラス中を見渡すと、男子はものすごい勢いでドン引きし、女子の大半は泣き出してしまった。

ちなみにそれを見て、男子が「上条、殺す」とっていたのは空耳だったと信じたい。

「か、か、か、か化科課下か可家加かかか………」

小萌先生は、倒れてしまい白目をむいて口をかの字に開いたまま「か」を連呼していた。

「こ、小萌せんせー！　大丈夫ですかッ！　小萌先生！！」

クラスの皆が小萌先生のまわりに集まっても、小萌先生はブクブクと蟹のよーに泡をふいていたので急遽担架で運ばれていった。もちろん、この授業は自習という名の質問攻めになったのは当然のこ

とであつた。

「完璧にとり残された転校生は。このヒドイ有り様を。ただただ眺めていた」

「……………。姫神さん。泣きながら実況しないでください……………」

上条、泣く泣くいった最後の突っ込みであつた。

或る日の出来事

上条BL疑惑事件、またの名を女子の世界恐慌は小萌先生の気絶によりさらに加速してしまったが、上条の命をかけた決死の説得のおかげかどんだん鎮火する方向へと向かっていった。転校生はというと、クラスの勢いに付いて行けず最初の爆弾発言以降、何も喋れずにただただ口をあけてポカーンっとしていた。

最後まで土御門と青髪は食い下がってきたが、「わたしにはちゃんと好きな人（女子）がいるじゃあぁ！！！」という事を大声で宣言したらやっと茶化すのをやめてくれた。

ついでにいうと、そのあと「だれ？ 誰？ だれ？ だれ？

誰？ だれ？ ……」と、クラスメートのほとんどから質問攻めにあったのは言う必要もない。

やっとのことで脱出することに成功した上条は、硬直したままポカーンとこちらをみている転校生に声をかけてみる。

「おい。大丈夫でーすかー？ 生きてますかー？」

「……あ、ああ」

転校生は声をかけられ、放心状態からの復活に成功した。やや眼はうつろだが焦点はしっかりと定まり、眼をこちらに向ける。上条も、転校生のメガネの奥の眼を覗き込むように見る。

ゾツとした。

眼鏡の奥の中にある闇。

見ているだけで吐き気をもよおす。

殺気、悪寒、狂喜。

あらゆる負の感情が全身を駆け巡る感覚。

たった1秒間だけで、体が震えあがるほどの恐怖を感じた。

気付けば、冷や汗が背中をつたっていた。

「…どうしたんだ？」

転校生が不思議そうに尋ねてくる。それに対して上条は驚きつつも

「…なんでもねえ。」

我にかえり、すぐ眼をそらした。

「そんなことより、昨日はどーも。おまえのおかげで上条さんは散々な目にあったのですがあ？ それに対しての謝罪は？ すいませんは？ ごめんなさいは？」

話題を無理やり変える上条。というかそれを聞くために声をかけたのだ。

昨日のことを思い出しつつ怒った調子で言う。

「あれは明らかに突っ込んできた君が悪い」

即答。

少しも謝罪の気持ちがない言葉を聞きキレそうになる上条だが、

一応初対面ということなので怒りをおさめた。（上条さんは元々善意の塊なのだよ。その設定は忘れちゃいけないのだッ!）

誰に言っているか分からない1人ごと呟く。

「…まあ、それは置いといて。そういやあ名前まだ聞いてなかったな。なんてーの？」

「そうだった。俺の名前は七夜志貴。今日からこのクラスに転校してきました。みなさん、よろしくお願いします」

礼儀正しく自己紹介をする志貴。昨日の態度とははるかに違うと思う上条。絶句する青髪達。

「んなッ!? バ、バカなッ!! このクラスに超まともな転校生がくるなんて……! 今まででは考えられない事態なのにゃ……!」

「軽く。私を。侮辱しているのだけど。」

「う、嘘や!! こんなまともなヤツ、このクラスに来るわけない!! 絶対何か裏があるはずや!」

「私は。裏があると。思われている?」

好き好きに勝手なことを言うクラスメート達。一向に話が進まないのであった。

話は5限目で最後の授業である能力判定に進む。

あのあと、唯一のまともキャラ(?)な志貴にクラスみんなが質問攻めし、てんやわんやになってしまったので仕方なく上条が止めに入ったのだが、逆効果で余計にややこしくなった。

またもや決死の説得で、なんとか納得の成功をはたした昼休み過ぎのことである。

「不幸だ……」

そんな感じで今に至るわけだが上条は今、廊下で並んでいる列の最後尾で青髪と土御門デルタフオースと新たに加わった七夜志貴と会話をしている。

「能力判定なんかしたって前と変わらない悲惨な結果で終わるに決まってるよ。予知能力なくても見え見えなんだよこのオチはッ！」

「カミヤん、一寸先は闇ってことわざ、こんな時使うんやね」

「使い方間違ってるにゃ〜? 泣きっ面に蜂のほうが合ってると思うぜよ」

「はぁあ〜? 明らかにオカシイだろそれ。あなた方は高校生にもなってことわざの一つも知らないんですかあ〜?」

「何ゆうてんねん! 知ってるに決まってるやろ! そんなこと言

ってカミヤンの方が知らないんじゃない？」

「バカだな、青ピ。カミヤンの脳は小3以下なのを忘れたのにゃ？」

「あつ。そうやったね。ごめんごめん。」

「……………」

いまだき中学生ですら、こんな低レベルな言い争いはしない。しないはずだが。

例外は何事にもついてくる物なんだと、思い知らされた志貴であつた。

列が前に進む。

「そういや、志貴の能力ってなんだ？ 自己紹介の時は言わなかったし」

突然話を振られた志貴はちょっとびっくりした。

「えっと、オレは……………。……黙秘権使っていいですか？」

ついうっかり自分が無能力者なのをいいそうになってしまった。

眼を泳がせる志貴をみて、何かを悟った上条達。

上条達はそれ以上は追及してこなかった。自分も同じ気持ちだつたことがあるからかもしれない。

そうこうしている内に列はどんどん前に進んで行く。上条達も前に進む。

廊下の壁にはいろいろな掲示物が貼ってあって、中には今週のオ

リコンランキングやら、
最近の話題になったニュースなどがあった。」

志貴はふと目をそちらに向けた。

それに気付いた上条は

「どうした？　なんかおもしろいもんでもあったか？」

と気軽に話しかける。

「ん？ いやさ。最近は能力者が殺される事件があったから、気にな
ってさ」

そう言って指をさす。さした方を見るとそこには『能力者連続殺
人事件の謎』と大きく書いてある新聞の切れ端があった。

「ああゝあれね。物騒になったもんだねゝまったく。おちおち買い
物にも行けねゝよ。風紀委員^{ジャッジメント}や警備員^{アンチスキル}は何やってんだよゝ」

上条の言葉を聞きつつも、目は新聞の方を向いていてジッと読んで
いる。

何をいっても反応がないような雰囲気だったので黙っていること
にした。

読んでいるその姿は、どこか寂しそうでそれでとても悲しそ
うだった。

しばらくすると上条の能力判定の番が来た。

上条は保健室みたいな教室の中に入っていた。それにつられて青髪と土御門も入っていく。

中はもう人いっぱいだったらしく、志貴は入れなかった。

「じゃ一丁がんばってみますかね」

「お先にー」

いったんの別れを告げ、早く終わらないかなーと自分の番を待つ。

何があったかは全くもって検討もつかないが、中でどなり声と絶叫と悲鳴が交じった声が聞こえてきた。聞かなかったことにしようと決意する今日この頃。

中から出てきた上条たちは何故か頭がアフロのごとく爆発していて、体中あざややけどなどがいっぱいあった。

世の中には知らない方がいいという事もあると、また新たに知った志貴だった。

ようやく志貴の能力判定が終わった。目隠しポーカーや卵を割ら

ずにバランスをとったりといろんなことをやったが、結果は無残にも前と変わらずレベル0だった。

志貴にとってはいつものことだったし、別に能力が上がろうがそんなことは気にしない。

だけど、やっぱり学園都市にいてレベル0というのは痛々しすぎる。

何のためにここにいいのか分からなくなってきて、努力しても変わらないこの現状に嫌気がする。

複雑な気持ちのまま、誰もいない寂しい廊下をテクテクと歩いて行く。

教室に戻り、やっと帰れると思った矢先に上条がドア付近で待ち伏せしているのを発見した。

上条が何気ないようなそぶりをしながら尋ねてきた。

「えーと、能力判定、どうだった？」

おそろおそろ聞いてくるので、気を遣っているのがバレバレである。

くすつと笑い、答える。

「やっぱり変わらないよ」

「っそか」

自分から聞いておいて、自分から悪いことしたくみたいな顔をされても困る。

変な奴、そんな風に志貴は思った。

突然、上条が言う。

「でもさ、能力が上がらなくなったっていいじゃん。能力でその人間がどんな人間かって決まる訳じゃないんだしさ。そんなに落ち込むなよ？ オレだってレベル0なんだぜ？」

上条（人間性が悪い？）がいうと説得力に欠けて慰めているのか
貶^{けな}しているのか分からない。

だけど、何故か心が温かくなった。

「……そうだな。ありがとう」

「何いってんだよ、こんなの普通だろ？」

笑いながら答える当麻。その笑顔はとても優しかった。

こいつといると居心地がいい。いつかのアイツのように。
そんなことを思った。

そして一緒にバカみたいに騒ぎながら、帰路についていった。

覚醒

いつしかもう日は完全に沈み、辺りは真っ暗になっている。なぜこんなに時間がたってしまったのかというと、帰っている途中で突然上条が、

「あ、ヤバい！今日スーパールのタイムセールの日だった！わりいけどよってっていいか？」

と言ってきたので特に帰ってもすることがなかった志貴は「いいけど」と答えてしまい、スーパーに行くことになったのだが、

「くそ、なんてこった！あまたの歴戦を勝ち抜いた戦国時代最強の武田信玄槍部隊ですら攻略できなかったと言われたあの猛者達（タイムセールで目がギンギンになってる貧乏学生達）相手に武器も仲間もなしに突っ込もうとしてしまうなんて！　オレとしたことが！」

「…だから？…」

「……。うわーん、あんなこと1人で突っ込める訳ねーんだよ！おまえも手伝ってくださいッ！」

と手を引っ張られ強引に、学生達（主に苦学生）が何故か普段発揮することのない人間の限界をはるかに越えた超人的な力を使って闘う、肉売り場という名の戦場への特攻を余儀なくされた。

「我こそは最強（のお肉ハンター）なりイイッツアー！！」

けっこうノリノリな上条は叫びながら、戦場へと出陣していく。

「っはゝ。くそ、こうなったら徹底的にやってやるよ…！ …全員
ブッコロしますからね？」

無理やりな飛び入り参加を決め込む羽目になった志貴は、かなり
ヤバめな空気を身に纏いヤケクソになりながら出陣していく。

が。

2人の勇気ある特攻も空しく得た戦利品は2、3個割れた卵と賞
味期限切れのひき肉1パック、そして件のいちごおでんのみだった。

あまりの悲惨さに志貴と上条は、嘆くどころか言葉を失っていた。
闘いの傷跡が残っている顔は、死んでしまいそうなくらいに青白
く、目は2人とも死んでいた。

そのあまりの悲惨さにレジの店員さんも同情してしまっただけ、
それらの戦利品を半額でいただくことができた。正直いって2人は
全然うれしくありませんでした。

ボロボロの体を引きずりながら、2人は学生寮のちょっと手前付
近を歩いていた。

「あゝあ。結局行くだけ損した。なんていうか、不幸だ…」

「その不幸にオレを巻き込まないでほしい。だいたい何なんだその不幸体質は？」

「これは生まれた時から備わっていた超いらない能力なんですよ……なんでオレばかり……」

「そんなこと言われてもな」

「うるせー。愚痴らなきゃ消化できないんだよ!! 毎日こんな不幸に会ってみやがれっ! 絶対に愚痴らなきゃいけないから!」

「それこそ、そんなこと言われてもだな。だいたいおまえみたいに不幸体質じゃないし」

「つくううう。ホントにテメエを不幸にしてやりたくなってきた!」

「はは、ごめんごめんって。ちよつ、ま、待てって。ゴメンって言ってるだろ! 黒いオーラ出しながら近づくな怖いから!」

何気ないやり取りをしながら、街灯をつくくらい暗くなった道を歩いている。

さすがに昼間ほど人気はないが、それでもかなり人が行き交っている。

普通、学校によって寮の門限は決まっているが夜の外出は禁止されている訳ではない。

門限以降の時間に、電車やバスなどがないだけで、外出は認めら

れているらしい。(一部を除いて)

「そういやおまえって、何でうちみたいなクソ学校きたんだ？　まさか姫神と同じ理由だったり？」

ちよっただけ黙る志貴。苦虫をかみつぶしたような顔になっている。

「……。……凶星？」

ふっきれたみたいになって、志貴は答える。

「：まあこの際だからはっきりしとくけど、オレはここに来てからずっとレベル0なんだよ。別に姫神さんとほとんど同じではないよ。ただ前の学校はちよっただけ居辛くなったただけってのもあるし、単に親の都合ってのもある」

途中から、何かを思い出して懐かしむような顔になって、やがて遠くの空を見始めた。

「ふうん。まあ、どーでもいいけど」

「どーでもいいなら聞くなよ！」

即座に振り返りツツコミをいれる。ぎゃあぎゃああと騒ぎながらさーらに歩く夜の道。

「当麻って面白いな」

「褒めてるよーには聞こえねー」

「ははは、褒めてんだよ」

スッ、と。

その時、ある人が2人の横を通り過ぎた。長い白髪をした女性は
何気なく横を通り過ぎた。

それだけの、たったそれだけの行為で、志貴の中のなにかが壊れ
た。

「――（え？）――」

（ドクン）

その人はとても綺麗な人だと思った。
その人はとても整った顔立ちだった。

その人はとても肌の白い人だった。
その人は細くて華奢な身体だった。

それは簡単にキレソウだった。
それをヤツてもいいのは自分だけだと思った。

それをヤリタクナツタ。
それはトテモ気持ちのいいコトなのだと、オモツタ。

（ドクン）

その貌をグチャグチャにしたくなった。
その身体をコナゴナにしたくなった。

気付いたら路地裏めがけて突っ走っていた。
遠くから声が聞こえた気がする。ひどくうるさく感じた。聞き流したフリをした。

眼が熱いなあ。なんでだろ？
そっか、眼鏡のせいかな。だったら外してしまえ。

ああ、なんか視えるなあ。
線と点がそこらじゅうに視えるよ。
すごく嫌だこれ。

さっきのヤツにも視える。なんだろあれ？
まあいいや、とにかく、早くしたいし。

なんでこんなにも嫌なんだろう？
嫌だな、
嫌だ、
いやダ、
イヤダ、
イヤダ。

———ならどうする？

斬ってしまったえ、そうだそうすればいいんだ。
ちようどイイモノがあるし。

「あああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああ」

そこにあつたのは、地面に広がる血と肉片だった。

例の病氣

それは突然だった。

白く長い髪を持つ女性が自分たちの隣を横切った時に、それは起こった。

志貴の顔が、歪んだ。

そういう表現が多分、一番正しいのだろう。

苦痛に歪んだわけではなく快楽を楽しんでいるわけでもない。

だが、それは他人を嘲笑っているようで悲しみに打ちひしがれているようであった。

なんともいい難い表情。

なぜこんな顔をしているのかは上条には分からなかった。

なにが起こったのかイマイチ分からない。ハテナマークを浮かべる上条。

だから、志貴にどうかしたかって尋ねようとして顔を覗き込んだ。

そこにあったのは、明らかに異常なモノを含む志貴。

そして、それはおぞましいほどの殺意。

穏便そうな顔をしているくせに、心の中では殺したくて堪らない。殺したくて殺したくて、うずうずしている。

眼がそう物語っているのだ。

（ヤバイ）

そう直感した。

その殺意に負け、ビクツツと震えてしまった。ちゃんと立っているはずなのに、足が竦んでしまった。

逃げたい、一刻も早く。

ここから！

早く、早く、はやく！

怖くて恐ろしくて仕方がなかった。震えが止まらなかった。

顔を志貴から背け、必死に心を落ち着かせようとする。

（くそっ、くそっ！ 止まれ止まれ！ 止まれってんだよ！！ なんで止まんねえんだよ！）

それでも、恐怖は心に染み付いて離れようとはしなかった。

志貴がオレを殺すんじゃないか？

あいつが。

オレを。

どうしようもない妄想だけが、頭の中を電撃のように駆け巡る。

上条は志貴を怖れていた。

どうしようもなく。

突然、志貴が走り出し上条の下から離れていった。

緊張が解けストンと、腰が抜ける。

そして、自己嫌悪。

オレは学校でなんていった？ あいつに何ていった？

（何いってんだよ。オレ達はもう友達じゃねえか）

オレはあいつの友達じゃなかったのかよ！！ あいつのこと信じてやんなきゃいけねえだろうが！！

あいつに何があったかよくわからねえけど、それでもオレはあいつを助けてやらなきゃいけないんだ！

覚悟が恐怖を上回り、そして力となる。

ああそうだよ！ オレはあいつの友達だろうがッ！！

友達であるオレが助けないと駄目なんだよ！！

上条は大地をしっかりと踏みしめ、足を前へ前へと進める。

揺ぎ無い覚悟を抱き、たった1つの事を成し遂げるために、上条は動く。

御坂美琴

御坂美琴はコンビニで立ち読みをしていた。

コンビニというと常盤台中学のすぐ前方付近に位置している場所である。

寮からは大した距離はないので帰ろうと思えばいつでも帰れるのだが、美琴はいつまで経っても漫画を手を持ったまま動こうとしなかった。というより、動く気配がない。

「(フムフム。やっぱあいつが犯人だったか)。最初から怪しいと思ってたのよね。だいたいあいつがアレしてる間にこんなことできる訳ないし、…………)」

前から気になっていた漫画『密室×密室探偵』の続きを黙々と読んでいる。

夏休みからずーっと気になっていたのだが、原作者が突然体調が悪くなってしまう執筆スピードが遅くなったのだ。さらに原作者は余程仕事熱心なのか、体調が回復しないまま描いていたらしくついにぶっ倒れて連載が無期限ストップになった。全く持って本末転倒である。

美琴としては「うがーっ！ 気になる気になる気になるっ！ 作者のバカっー！ 何で倒れんのよ。てか倒れても病院で描くくらいの努力はしなさいよねっ！」といった感じにかなり恨んでいた。

しかし、作者は案外元気だったのかケロッとした顔でひょっこり戻ってきたらしい。

そして連載が復活したのが今日の出来事。

若干の怒りを胸にさっそくコンビニへ行った美琴だったが、なんとうれしいことに復活記念に大増量20ページになっていたのだった。

そして今に至る。

すっかり日も暮れて、月がこんにちわしている。

寮の門限はとっくの過ぎているのだが美琴はそのことに全く気付いていない。

真剣な眼差しで淡々と読んでいる姿は、周りの人達をかなりビビらせていた。常盤台のお嬢様がこんななんの変哲もないごくごく普通のコンビニで立ち読みしていたら、多分ハイジも眼を大きく開き口をあけて驚くことだろう。

パタン

ようやく読み終わった美琴。長時間たっていたのでかなり肩が凝ってしまっていた。

大きく伸びをしながら、外の様子を見て愕然とする。

「んー。ああ。おもしろかったあ。大分時間経っちゃたなあ。……：。うわああああああ！！ ヤバいっ！ 門限1時間も過ぎてるっ！」

美琴の声に店員がビクツと驚く。周りの人達も驚いた表情でこっちを見ている。

「……。すいませんでしたー」

恥ずかしくなって、謝りながら速足でコンビニから退散する。

外に出てため息をつく。

何かを考えてそして即決断し、

「もういいやあ。こうなったギリギリまで遊んでやるわあいつ！」

自暴自棄になる。

と、そのとき。

ドンツと。

誰かが美琴にぶつかった。

「あつ、すみません」

すぐに謝る美琴。

だが相手の人はそのまま向こうの角を曲がって行ってしまっていた。

ポカーンと待ちぼうけを食らっていたが我に返り、

「何よあいつつ！ 感じ悪ー！」

愚痴りながら、ビリビリッと電撃をちょっとだけ放ちストレス解消。

が、また誰かが美琴の背中にダイレクトアタック。

イライラボルテージが一気に跳ね上がった美琴。

さすがに赤の他人に電撃ビリビリッ！ という訳にはいかない。
常盤台中学エースの名はだてじゃないらしく、そこは大人の対応で
応戦。

「すみません。けど私が100パーセント悪いってわけではありませんよ
ね？ それは確かに私がボーっとしてたのが悪いですけど、
当たってきた方も十分悪いですよ？　そうですよね？」

とにかく謝ってもらいたい常盤台中学エースであった。

しかし、現実には美琴が考えてるほど甘くはなく、1人目と同じく
そのままさっさと向こうへ行っていて美琴の話なんて数秒たりとも
聞いてはいなかった。

「……………」

100歩譲ってイライラを抑える美琴。背中がジンジンと痛む。

通行人などは美琴の放つオーラに気圧されつつ、プレッシャーを
感じていた。

人々はヤバイオーラを放つ美琴を避けて通るようになった。

しかし。

泣きっ面に蜂とはまさにこのことだといわんばかりに、美琴の背
中に3度目の直接攻撃。

美琴の堪忍袋の緒がブチンッと音を立ててキレた。

当たってきた犯人の顔を見るとそれは何処かで見覚えのある、
とか既に見慣れているツンツン頭が目の前にあった。

紛れもない上条当麻であった。

ノイズ

上条当麻は暗くなった街中を駆け巡っていた。

「くそっ、あいつ何処行きやがった！」

電灯に照らされた夜道を走りつつ叫ぶ。

道行く人々達の奇異な視線が突き刺さるにも関わらず、上条はその足を止めようとはしない。

交差点を突き抜けた。

公園を横切った。

路地裏を通過した。

だが、いろいろなところを回ってみてもアイツの姿は何処にもなかった。

まるで最初からいなかったかのように。

信号を無視する。

反対側から来た車にぶつかりそうになるが、乗っていた人のドライバートクによりなんとかぶつからずに済む。車に乗っていた人が何かを叫んでいたが、そんなこと気にしてられない。

「絶対に探し出して、1発ぶん殴ってやる！」

何故いきなりおかしくなったのか。

何故あいつはオレから逃げだしたのか。

上条当麻は志貴のことを何も知らない。

だからアイツにはまだ聞かなければならないことが山ほどある。
理由を聞いたうえで1発ぶん殴ると心に誓い、また前へ前へと足を進める。



「ふ、ふふふふ。グヘ、グヘヘ。ついに、ついに、来ましたわ…！」

暗闇が支配する空間。

明かりなどは一切入らない。何処にそんな空間があるんだよツとツッコまれたら、例のあの方の一室だよツと答えるのが、ここ常盤台中学の暗黙のルールになりかけている。

白井黒子はそんな中に居た。

ベッドの上でゴロゴロと転がりながら気持ちの悪い笑みを浮かべている。

その手にある『ブツ』を眺めながらニタニタと誰もいない空間に向かって微笑んでいる姿は、不気味以外の何物でもなかった。

「これを着た、あ、あのお姉様を拝めるなんて…。うへ、うへへへ

へ」

ジュルジュルと、涎がベッドに垂れている。

だが白井はそんな物眼中にありませんと言わんばかりに目の前の『ブツ』に魅入ってしまっている。

「お姉様、嗚呼お姉様、お姉様（五七五）。いざ早く帰って来てくださいまし。愛しの黒子がこのお姉様との愛の巣（自称）でお姉様の降臨今か今かと待っておりますのお。はああああああ。お・ね・え・さ・まあんっ」

という具合に、軽いトランス状態にある。

目はハート型に固定され、身体は奇妙なダンスの真っ最中。おまけに言動は意味不明。頭はかなり沸騰しているらしく脳天からは湯気が少々。

何がここまで白井の妄想を駆り立てるのは、白井のその手にある。

白井の抱えているのは『プチ妖精チラ見えナースセット（はーと）』と書かれた小包み。

『墮天使エロメイド』の数倍は進化した泣く子も黙るメイドセットの究極完全体である。

「うええへへへへへへへへへへ」

何かもう、かなりアレっぽい。状況説明ができなくなるほどやばくなっていた。

「…………はああ。一人で興奮しても空しくなるだけですわね。それにしてもお姉様ったら。いくらなんでも遅過ぎですわ。いったい何をなさっているのかしら？ ……ハッ！ まさか勘づかれた!？」

もちろん白井にはそんな能力はない。

そして人はこれを一般的に妄想と呼ぶ。

少なくとも白井と御坂の周りにいるヘッドフラワーガーデンとその愉快的仲間が影でそう呼んでいるのは御坂以外に誰も知らない。

そうとも知らず白井は枕に顔を押し付け、有りもしない妄想を駆り立てている。

普通の白井ならこの時点で気付いていたかもしれない。いや、この状況だからこそ無理だったと言える。確かに今の白井は感覚が鈍っていると言わざるを得ない。

現状でこの事態に気付けた人間は超能力者（レベル5）、あるいはそれに関係した能力の持ち主でしか出来なかったという訳ではない。むしろレベルが低いほど気が付きやすい、その程度の事だった。なので、もし白井が気付いていたとしても気にも止めなかったはずである。

それはノイズのような物でありAIMと等しく極々微弱な力である。

人々の生活にはこれと言った実害がないので、特別重視されていくという事はない。

パソコンの中にある要らないモノを削除しても完全には削除しきれず何かしらの残骸が残るように、学園都市の能力開発にも同様の現象がある。

能力の使用について演算や処理などの必要不可欠な計算は、全て使用者の脳が行い同時にその脳に直接負担をかけると言われている。負担をかければかけるほど脳の計算能力は衰え、最悪能力がつかえなくなってしまう。それを防ぐために、脳は自ら能力使用後の処理のち使用した力の履歴というものを自然に削除しているのだ。

これこそがノイズの発生源である。

能力者は必ずこの脳の機能を使っている。

だからノイズが完全に消えることは理論上有り得ない。

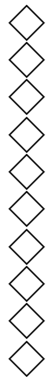
つまり、ノイズとは何処であろうとも必然的に発生するものなのだ。

だが今の場合、例外である。

普通ノイズは、発生源であるところは常に一定であるのだ。いつも同じ場所でしか発生しないしさらには発生源は特定出来ないという特典つきなのだが、今回は違っていた。

常に一定の場所で発生するという事は、同時に発生する場合、それらが一つの塊となって一気に発生するという事。

白井は気付いてはいなかった。



角を大きく迂回した時ふいに誰かとぶつかってしまいドンッと相手は後ろに倒れた。

「うわっ！」

上条はとっさに手を突き出していたので、倒れずにその場にとどまれた。しかし相手はちやうど反対側から振り返る直前だったらしく、ガードもブロックも出来ず成るがままになっていた。

「だ、大丈夫ですかっ？」

等と言っている時間すら、今は惜しい。

「悪い！ 今急いでるから！ 文句ならフリーダイヤル0120-783-6402（悩み無用）に電話してくれっ！」

相手には悪いが今は緊急事態なのでそこら辺は察して欲しい。

「私が髪の毛で悩むかあああああああ！」

だからそこら辺は察して。

「何で私がアデ○ンスにクレームつけなきゃいけないのよッ！ 私は髪が全く生えないからって裁判まで起こす、髪をこよなく愛する四十代後半のおっさんかッッ！！！」

全力でツッコまれた。

しかも超聞き覚えがある声。

「あれえ？ おかしいなあ？ オレの知り合いはそこら辺察してくれるヤツしかいなかったはずなのになあ？」

相手は何を言っているのかさっぱり分からないようで、さっきから啞然としていて口が開きっぱなしだった。

「…は、話が見えない…」

御坂美琴、通称ビリビリ。

ペタコンツと地面に座りながら、ツツコんだり呆れたりする忙しいヤツ。

取り敢えずシカトする事に決定。

というかコイツと関わって幸福であった試しがない。さらに言えば、むしろ余計に不幸になった気がするのが上条の経験上から統計して分かる。

「じゃ」

シュビッ！ とその場で敬礼し、また走り出そうとする上条。

何度も言うが今は急いでいる。関わっている暇はない。

が、足を前に出そうとした瞬間、上半身だけが前に倒れ下半身はそれに着いてこれなく地面にモロ顔面が直撃した。

「ふふん。私を無視しようとするからよ」

得意顔で何か威張っているビリビリもとい動くコンセント。

原因は御坂が上条の足をガッチリとホールドしていたからだ。

上条はしばし硬直。

御坂は立ち上がって

「ふ、ふん！　ざまあみろってのよ！　いい気味だわ！」

と少し顔に筋を立てながらひきつった笑みを浮かべている。

普段から人の放つ罵詈雑言を一身に受け精神的にねじ曲がり、やや被害妄想気味な上条視点で言うところ「あっはっはっは！　バカねアホねトンマねデベソねえ！　あんた何かが私という神を無視するなんて（以下略）」とほざいているようにしか見えなかった。

つまりは凄く不幸だと言う事である。

ロギヌス

「うっうっう……。なんでオレばかり……。いまさらながら涙が出てきたよ、お母さん……」

地面に顔を埋めて密かに涙を流す高校生というとてもシユールな光景が、常盤台中学エースによって誕生させられていた。美琴は立ち上がって手を差し伸べようとしたが、上条の放つ強大過ぎる負のオーラに気圧されてしまい突き出していた右手を何処となく彷徨わせていた。

「なんでマジ泣きしてんのよあんたはっ！　まるでこっちが全部悪かったみたいじゃないのよ！　まあ、少しは私にも否があったかもしれないけど、あんたが毎回毎回毎回私を無視し続けるからでしょ……！」

「全然理由になってねえ！　大体無視してもしなくてもどっち道オレがビリビリされるに決まってるのになんでわざわざ自分から死に行くような真似をしなくちゃならないんだ！」

ガバッと、起き上がりざまに的確なツツコミを入れる上条。

「うっさいわね！　声かけたただけでしょ……！」

「声かけられただけで生と死の境目を冒険させられる人の身にもなりやがれ……！」

「ああもう！　そんなに死にたいならいっぺん死んでみやがれえええ……！」

討論するのが嫌になったのかならなかったのかは明白である。

御坂は何か吹っ切れたように、上条に向かって容赦などこれっぽっちもない一撃を放つ。

超至近距離で放たれた電撃は、上条が一息つく前に正確にその左胸の心臓のある場所を狙っていた。だが上条は、振り向きざまに軽く手を横薙ぎに振り回してそれに触れる。

瞬間。

100万ボルトを越えるであろうその一撃は上条の右手に激突し、いつの間にか出来ていた周りのギャラー達へと向かって火花を撒き散らす。

ビリビリ、と上条の腕に振動と痛みが走る。

一瞬だけ野次馬から、先程までの美琴とのやり取りに対しての冷やかしの声が上がっていたように思われたが、至近距離にも関わらず電撃のそのあまりの速度で巻き起こった爆発的なほどの風圧に、一同、間の抜けた表情をする羽目となっていた。

「で、やっぱりこうなんのね。いつになったらこの立ち位置が逆転するんだか」

美琴は、柔らかい口調でそう言う。

声こそ穏やかであるが頭からビリビリと電撃が漏れているところを見ると、怒り具合がかなり高めだと見受けられる。

この場合、当たっていないという表現は正しくない。当たってはいるが、上条の身体や直撃した右手にすらも外傷の類いは全く見受けられない、というのが正しい。つまり平たく言えば、突き出した

右手は電撃を打ち消していたのだ。

「……………」

「全く。その力って絶対に反則よね。超能力者（レベル5）をなめてると思えないわ」

半ば呆れつつ半ば怒り浸透の美琴。

あからさまに、全力の一撃を防がれてなおかつ無傷。さらに言えば、上条は全く驚いた様子もなく平然とスカした態度である。

誰であろうともこの状況で腹が立たない人間はいない。

一方の上条は、しかしやはりと言うべきか、

「（あ・ぶ・ぬ・えエエエエエエ！！！　し、死ぬ、死ぬ！
うひょおおお！！）」

やはりである。

今回は単調な攻撃だったのが幸いし上手く右手で防ぐ事が出来た。しかし次回があるのならば、その時も防ぎ切れる自信は上条にはない。大体、高速で吹っ飛ぶ雷鳴如き電撃を目で追いながら防ぐという事自体が人間技ではない。

たまたま運良く電撃が右手に当たった、それだけである。

「……、いつもながらマジで殺す気でしたね……」

立ち上がる気力も尽きたか、その場でヘナヘナと萎れてしまう上条。

偽っている余裕の笑顔が痛々しい。

「ふん！まあ、逃げなかっただけマシだわ。これに懲りたら二度と私を無視しない事ね」

「姫のご忠告には大変痛み入りますが、何で無視されんのにそこまです拘るんだよ？」

前々から疑問に思っていた。何故、御坂は無視される事に過剰な反応をするのだろう。

「はうっ！　そ、それは！　えっとー…。…っうう」

答えられない。

上条から無視されたくないだなんて。

ボッ！　という擬音が似合いそうな具合に美琴の頬は朱色に染まっっていく。

「悩むような問題かよ。つまるところのストレス発散の類ですか？　年頃の女の子だし分からなくはないけどさ」

そんな美琴の心中を察したつもりが、全く的外れな答えに結び付く恋愛経験皆無の上条。

「ち、違うわよ！　そんなんじゃないくて……」

女の子、というワードに少なからずも照れが生じてしまい、美琴

はこれ以上ないくらいゆでダコ顔負けの赤さになっているところへ、さらに追い討ちをかける上条。

「じゃあ何だよ？それとも答えられないような事なのか？」

どうしてアンタは返答に困る質問しかしないのよ！

言いそうになる口を抑えて、代わりの言葉を必死に検索するが

「つと、えゝゝ。つと」

出てきたのは、濁った言葉としどろもどろになる自分だけ。あからさまに目を背けてはいるが、その顔はもうすでに耳まで真っ赤に変色していた。勿論、上条にはすべて見えない。

「…な、何だっていいでしょ！ とりあえず、ストレス発散ではない事は確かだわ」

「…さいですか。…とりあえず、ストレス発散という名目で殺害される心配はなくなったんだな。なんつか素直に喜べねえよ…」

一時凌ぎの緊急回避に成功。

美琴は顔の火照りが冷めていくのを直に感じつつ、

いつまでたっても素直になれない自分に自己嫌悪していた。

はあ、と。

密かにため息をつく。

そんな事にも全く気付かない上条は、一体どんな名目なら殺人を許可するのだろうと考えて、ハッと気付く。

「そうだ！ お前、ここらでメガネを掛けたオレと同じくらいの身長
のヤツ見かけなかったか！？」

「は？」



「で、今回オレは何すりゃあいいんだ？ オレの仕事なんてどうせ
またアレって話なんだろう？」

「良く分かってんじゃない。殺人鬼が板に付いてきた証拠だね」

「よくいうぜ。お前の方がよっぽど鬼に抜擢だっつー話」

第十七学区。

『ロンギヌス』の構成員であるところの氷河ヒョウガキエン気炎は、第十七学区
の道をペットボトル片手に進みながら、静かに誰ともなく愚痴る。

「またまたあゝ。ご謙遜なさらずにい。氷河を置いて右に出る殺し
屋なんて、前学園都市第二位様以外にしないよお」

同じくして『ロンギヌス』の構成員であるところのユーゼニィ
ティは、氷河とかなりの距離をあけて、同じく第十七学区の道を、
同じくハンバーガー片手に、氷河から半歩ほど離れた位置で歩いて
いた。

「『^{ダークマター}未元物質』か…」

「そお『未元物質』様。あんだけアレイスターをぶち殺すとか言っ
^{アクセラレータ}といて、一方通行如きに殺されるとか、マジウケル」

ユーゼはケタケタと屈託のない笑顔でそう笑った。

「ぶくく、今じゃカプセル生活なんでしょう？ うっ、ぎやははは
はは！ わ、笑い堪えれねエっての！」

「まだ死んじやいないがな」

「ほとんど瀕死状態の人間を生きてるとかって、普通言う？ 動物
というか植物に近いんじゃないのかなあ、あはは。光合成する分ま
だ植物の方が価値あるじゃん。ぎやはは！」

「そうかもな」

無関心と顔に書かれていなくとも、無関心さが全身から伝わるく
らいの聞き流し方だった。

「何よつれないわね」

「別に」

そっぽを向くと、ユーゼはふふんと言った感じに言う。

「元ヒーローさんは、オンナノコには優しいはずだよねえ？」

ブツと。

柄にもなく口に含んでいた炭酸飲料を盛大に吹き出す。炭酸飲料は綺麗な放物線を描き、図らずともレインボーロードを築き上げていた。

驚きの表情のまま彼女の顔を見やる。

「おい…。テメェ、それ何処で…」

「このメンバーに属してるうちは過去の経歴なんて何の意味も持たないの、知ってるはずだよねえ？」

妖艶な笑みを浮かべ、彼女は次の言葉を紡ぐ。

「傑作だわ。今でこそ自称学園都市最強の殺し屋なのに、過去には陽だまり中で仲間と笑いあっていたんだなんてねえ。そりゃあ私だって最初は信じられなかったわよお？」

コイツ……。

「堕ちるとここまで堕ちたね。二度と戻れない日の光をもう一度浴びようと頑張ってた時期もあるんでしょうけど」

どいつもこいつも……。

「どういう経緯があるのか知らないけど、闇は底なしなのは理解してるよねえ？」

「……っせエ」

知った風な口をききやがって……

「また戻ろうとか考えないでよお？ リーダーは、それなりアンタの事かってんだから」

「……うっせエ」

最悪の思い出が彼の脳内で急速にフラッシュバックする。
思い出したくもない、過去が。

「個人的には、戻ろうと頑張ったけど結局戻れなかったっていう面白シナリオ見てみたいんだけどね。あはははは！」

「いい加減にしろクソガキがッ！」

氷河がペットボトルの持っていない方の手を潰さんばかりの勢い

で握ったと同時に、辺りの空気が瞬間的に凍りつくような冷氣に覆われた。そして冷氣が露点以下に達した時、何もない空間から莫大な量の水滴が生じ、わずか1秒足らずでその水滴が音を立てて凍りつく。妙に乾燥した空気が漂って、氷河の両脇には一對の氷の刃が宙に浮かんでいた。

「いい機会だ。この際、白黒はつきりしとこうぜ。オレはお前と仲間になった覚えはねえんだよ」

ユーゼは空中に浮く刃には驚きもせず、ただそれを淡々と見据えていた。

「なる予定もなる気も一切ない。オレに仲間なんてクソくだらねえモンは必要ねえんだよ。それはオレにとってのテメエもそうだ。テメエという存在はオレにとって何も価値もない。テメエが死のうがオレにはまるで関係ねえって話だ」

彼女は氷河を睨む。

「何のつもりかなあ？」

「お前、言ったよな。学園都市最強の殺し屋って。つまりはそういう事だよ」

彼は握った拳を、ユーゼに向けて振り下ろす。

「――仲間の手で出すんだアンタって」

「――オレとテメエは赤の他人だ。仲間面すんのも大概にしろク

ソガキが。目障りだ」

ヒュッという音とともに放たれた氷の刃は、ユーゼの元へ滑空し、空を切り裂く。

しかしそれに対してユーゼは驚くどころか悠々と自ら氷の刃へと進む。

「くたばれ、外道。二度とその面見せんな」

あと数メートルといったところでユーゼは、顔を上げこう言った。

「—————そんなことしたら、どうなるか分かってるよねえ? ——」

直後。

氷河は恐れを感じた。

それも生半可な物ではなく、本物の殺気、まさしくそれ。それは丁寧に全身もれなく氷河を包み込むように、それは身体全体を丸ごと飲み込むように。

氷河を、襲った。

攻撃を静止させるのには充分過ぎた。

氷の刃はユーゼの喉元であと数センチというギリギリのところ
で
制止する。

「――テメエ…、何をしやがった…」

「特に何もしてないよお？ 単に氷河が腰抜けだっただけなんじゃ
ない？」

喉元に刃を向けられているのにも関わらず、平然と邪気のない笑
みを向ける。

「それに、今回の目的、果たさないとマジでヤバくなっちゃうか
もよお？」

今の目的。

殺る事。

最優先事項。

リーダー。

「……ちっ！」

「バカの一つ覚えてとこかな。アンタがバカで助かったよ、元々
私には殺人は性に合わないからねえ」

「勘違いするなって話。オレはいつかお前を殺す。これは変えられ
ない絶対事項だ」

「あは。いいよ、待っててあげる。その時は特別に私がアンタを殺

してあげるよ」

氷の刃がスーっとユーゼの喉から離れ、まるで雪が溶けていくように消えていった。

「ちっ！　じゃあな、クソヤロー。こっからは別行動だ。ついでに言っとくが、付いてきたらテメエの命は無え」

そう言って長い銀髪を揺らしユーゼに背中を向け、数キロ先に見える人だかりに向かって歩き出す氷河。

「ふうん。まあいいけど。楽だし」

頑張っつね〜と氷河に向けて大きく手を振り、やがて見えなくなると氷河とは真逆の方向を歩き出した。

しばらく進んでから、不意に彼女は胸ポケットに入れていた携帯電話を取り出した。たった一つしか登録されていない番号をプッシュする。

プルルル、プルルル。

数秒足って相手は電話に出た。

「ヤッホー。見てたでしょ？氷河一人で行っちゃったけどアレで良かったのかな？」

「無問題。既にこちらの準備は完了している」

「って事は『直視の魔眼』^{デッドライン}、確保したって事よね？」

「正解。魔眼は正常に機能しているが人格的に欠陥が見られる。修復は充分に可能な範囲。現時点では記憶の再生に成功している。だから、無問題」

単調な言葉遣いで説明する少年も『ロンギヌス』の一員である。

「ただ、たった今トラブルが発生してる。君はそのトラブルの根源を断つ。すなわち君の仕事」

「はいはい、分かったわよ。あああ、せっかく休めると思ったのに」

ガックリと肩を落とすユーゼ。それに対し、電話越しの相手は更に問いたです。

「君は偽っている。君の場合、休養を求むのならとっくに逃げ出していたはず。しかし君はこの仕事に参加した」

カツカツ、と。

革靴の独特な音が今は使われていない廃棄ビルに響く。片手で携帯を弄び、もう片手で落ちている壊れた電子機器を拾っては捨て拾っては捨てるを繰り返しつつ、ボロボロで足場のない床を淡々と進んでいた。

「真意のほどは図りかねるが、君の秤がこちら側に傾いたのは事実。それに加え、故意に氷河を突き放した可能性が9割半を占めてる。よって君は何かをしようとしている」

電話越しの相手は思う。

彼女の行動を決定する物とは一体何なのか、何が彼女を突き動かすのか、と。

「何を企んでる？」

自分たちのすべき事は与えられた仕事のみ。そして与えられた仕事を忠実にこなす、それだけのはずだ。

しかし彼女の仕事は一定して不規則であり、不可思議であり、意味がないように見える。

それは何故？

「べっつにいい。気ままにやってるだけだよお？」

階段。

崩れかけていて、三階下の階層まで見通す事の出来るくらいの穴が空いていた。

「ただねえ。この先面白い事が起こる気がするんだよ、あはは。だから私は進んでる」

階段を登る。

彼女は上を目指す。

まるで、何かを求めるかのように。

「君は、何がしたい」

少年は答えに至らなかった。至る事が、出来なかった。彼には彼女の真意が分かる事はなかった。

「――仕事の確認をする。現在、幻想殺しのそばには第三位の超電磁砲の存在を確認している。君は幻想殺しと超電磁砲を切り離して欲しい」

「イマジンブレイカーってあのイマジンブレイカー？」

「抽象的な質問には、答えることは出来ない」

「第一位様を倒した、あのイマジンブレイカーかって聞いてんのっ
！」

「その認識で間違いない」

へえと彼女は呟き、周りをぐるりと見渡す。

さすが廃棄ビルといったところか、壁は廃れ床は虫食いだらけ、
天井は半分以上破壊されていた。チカチカと薄気味悪く光る電灯の
中、ユーゼは階段を見付けて更に上へと進む。

「——いいよ。その仕事、引き受けてあげる」

「…」

「でもただじゃあやらない、一つだけ条件がある」

「…」

屋上へと進むドアを開く。

ユーゼはそのあまりの光景に息を飲んだ。

ライトアップされた学園都市を背景に月明かりに照らされ赤く黄
色く光る少年が、あまりにも惨過ぎて あまりにも美し過ぎて。

「『七夜』を私に貸して欲しい。当然リーダーの許す範囲で構わな

いから」

「…用途は？」

「内緒」

「……了解した」

通話を切って、携帯をどこかに投げ捨てる。そして前へ進む。その美しい少年の下へ向かって。ゆっくりと着実に。

彼女にはもう少年以外何も見えてはいなかった。

視界に入る背景も、屋上から見える景色も、何もかもが。月明かりに照らされている少年だけが目に映る。

と、その縛られた少年は口を開く。

「…こんばんは、お客様。わざわざこんな所までお越し頂いて、誠にありがとうございます」

少年は問う。

「…ご注文は、お決まりで？」

開戦

「だからここでメガネ掛けた奴を見なかったかって、聞いてんだよ！」

上条は、切羽詰まるような感じで美琴に聞いたのだ。

「見てない気もしないではないわね」

「曖昧なんだが見たってことでいいよな？」

「じゃあ見てないわね」

「どっちだよ！ しかも、じゃあって！」

何でこんなのに聞いているんだろう、これなら通りすがりの誰かさんに尋ねた方がまだマシだったかもしれない、いやしかし不幸の権化曰く付きこと上条さんがそんな事をすればまた良からぬトラブルに巻き込まれるに違いない。

と、身も蓋もない感想を抱く上条。

すると美琴は

「アンタの出現がインパクトあり過ぎて、その前の事はよく覚えてないのよ」

理由はどうあれ、上条さん的には今すぐにでもコイツの口を封じたいところだった。というか、コイツ、いつの間にか口が達者になってやがる。普段、適当にあしらっていたから、なのだろうか？

どちらにしても、あっちに主導権を握られているとなると少々厄介なのである。だって、コイツ、ところ構わずビリビリしてくるし。

「それにアンタ、何かと街中で結構騒いでるし。結構この辺りじゃ有名になってんのよ？ 知らなかった？」

「オレの知名度が上がったのは素直に喜ぶけどな。それぐらいオレにはカリスマ性があるんだと、勝手に解釈するぞ。ああ、何てプラス思考なんだろうなあ、オレ。プラス過ぎて、明日どんな不幸がやってこようとも笑って迎えられる気がする。むしろ、どれほどの不幸がオレを待ち受けているのかと思うと、今夜は眠れそうにねえくらいだぜ」

「つまり、明日が心配なんじゃないの。それって、限りなくマイナス思考に近い気がするんだけど」

「はっはっは。そんなこと気にしてちゃ、今後の人生なんて生きてけないんですよボクの場合！」

「悲しい現実ね……。もうプラスかマイナスか分からなくなってきたとこが得に。何となく、アンタの人生ってものを垣間見た気がしたわ」「はっはー、上条さんの的には、もうどっちでもいいんですけどね！ ちなみにオレの人生語るには一世代早い！」

「愁傷様」

どうでもいいと言わんばかりであり、なおかつきっぱりうざいと言いつ切るような物言いであった。

「一言で言いきられてるところ、御坂さんはワタクシに対して全く

同情してないと見えるのは、オレの錯覚なんだと信じたい……」

「同情はしてないけど、非情はしてるわよ？ アンタの不幸さ加減に」

「さっぱり意味がわかりませんか!？」

「アンタがその不幸の運命背負って生まれてきたこと自体が、可哀そう」

「インデックスと一字一句同じこと、言われた……。じゃなくて!」

話の腰を片っ端から折られている事に対して猛烈に不快感を覚えた上条であった。

というか、いつまで経っても本題に進まない。

「大分、話戻るけど、ついさっきの事を覚えてない訳ないだろ。実際はどうなんだ？ 見たのか、見なかったのか」

「うーん。仕方ないわね。教えてあげない」

「うん、そうか。って教えてあげないのかよっ!」

途端に、うおおと歓声が上がった。上条の放ったノリツツコミが意外にもギャラリー達に高評価だったらしく、拍手喝采絶賛激ボメの嵐が、ここコンビニ前の交差点で巻き起こった。

「へいへーい、彼女とケンカしたときはブツ殺してやろうと思ったが見直したぜコノヤロー!」、とか、「ヒヤヒヤしたぜ、いい恋愛ドラマをありがとー!」、などと、上条的にはこれっぽっちも嬉しくない感想まで飛び交う始末。ギャラリーはこの喜劇を何かのド

ラマ撮影と勘違いしているらしい。

アンタら、相当暇人なんですネ……じゃなくて！

もはや心の中のツツコミですらワンパターン化してしまうあたり、オレのツツコミの技術にはあまり期待出来そうにない事が推察されるね、うん。これからの会話は、もっと低レベルのボケを色々織り込んでもらう必要があるそうだな。ツツコミ側にとって、ツツコミやすいボケほど欲しい物はないからね。へっへっへ。オレって低レベルうー。以上、上条の脳内で起こる勝手極まりない客観的妄想でした。

ともあれ今現在の最優先事項は、調子づいて写メを撮り出しあまつさえ野次をとばしまくりついには握手して下さい、サイン下さいなどと勘違いも甚だしいこの連中の取り壊し作業であつたはずだ。皆さん、勝手な事ばかりしやがって。おい。そこ！ 部外者は立ち入り禁止だっつーの！

「だあああ、もう、黙れ愚民ども！ テメエらの言うドラマ撮影はもう既に終了してんだよ！ とつとと解散しやがれ！」

とギャラリーに向かって言い放ち、しっしっしと追い払う。

結果から言うで見事ギャラリー達の退散させるのに成功した訳だが、最後まで上条と美琴の関係は誤解されたままで、結局コンビ二前交差点から野次が無くなる事はついぞなかった。

ギャラリー
愚民達の反応は、「え？ もう終わり？ キスシーン無いの？ つまらんなあー」、という感じで、飽きた人から順にのそのそと撤収作業に移っていった訳である。

ちなみに余談だが、たった一人だけ仮ドラマ撮影が終わったというのにこちら側に向かっている物好きさんがいた。上条は気付いていないようだったが。

例によって美琴はというと

「れ、恋愛って……！」

「ん、どした御坂？」

今までの会話では上条の一枚も二枚も上手だった美琴であったが、やはり上条と一緒に場合である今は多少意識していたらしいので、この状態での恋愛関連系発言は美琴の赤面を誘うばかりであった。当然の如く、そんな事には全く気付かない罪な男の代名詞こと上条当麻。

「顔、赤いぞ？ 熱でもあるのか？」

「べ、別に熱なんて、ないわよ！」

形勢逆転。

一体何なんだコイツは。急にいつもの御坂に戻りやがった。まあ、こっちの方が御坂らしいっちゃ御坂らしいんだが。しかしこうも早く元に戻ると、こちらとしてはやりづらい事この上ない。

分かっててやっているのだろうか、と少しばかり疑ってしまう。

「お前さ、もしかしてオレで遊んでない？」

「……バカ、真剣に決まってんでしょ！」

何故か御坂は、顔を赤というかピンクに近い色に二段階分も進化させ、一生懸命に何かを伝えようとしている。

何でオレで遊ぶのにこんなに真剣なんだ……。

「結局、オレ達ってその程度の付き合いだったんだ……」

「その程度だったの!? 少なくとも私は本気だったのに……」

上条は、御坂が自分に対して真剣になるほどの遊び道具でしかなかったという意味で。

美琴は、今まで懸命に培ってきた（と本人は思っている）上条との関係がその程度でしかなかったという意味で。

二人は首をガックリと落としていた。

……。

「そうじゃなくて! ああもう、お前のせいで全く話しが進まねえじゃねえか!」

突然、上条は下がっていた頭をグルンと大袈裟に上げて美琴に向かって叫ぶ。

「大体お前が……、ってこれ以上話しを歪曲させてどうするのよ、オレ!」

「いかなり意味わかんない事でキレイなでよ、しかも自分に」

「お前が答えないからこうなったんだ!」

「分かったわよ、答えればいいんでしょ答えれば!」 「まったく。見たのか、見てないのか?」

ようやく、聞き込み捜査が再開した模様。

「実はアンタが来るちょっと前に、誰かにぶつかったのよね。何か急いでたみたいだったけど。なに、知り合いなの？」

「おい、そいつ何処行った!？」

上条は美琴の肩を容赦なく揺すった。何の躊躇いもなく。美琴には少しだけ上条の焦りが見えたが、それ以上に強く滲み出た思いもはっきりと見えていた。

それは、

あの時のような。

あの実験の時のような。

絶対に曲がらない強い意志であった。

「ち、ちょっと！　少しは落ち着きなさいよ！」

言われて、上条はハッと気付いたように美琴の肩を離した。

「わりい……。けど、これはマジなんだ。答えてくれ」

そう言った上条の顔はいつになく真剣な表情であった。普段のふざけた態度ではなく、本当に真に迫るような表情だった。

美琴はため息をつく。

またコイツの例の病気か、と。

「おい、こっちは真面目なんだっていったろ」

「分かったけどね、アンタそれ聞いてどうすんのよ」

「決まってる。追いかける」

「……っはああ」

今度は先ほどのため息より、数倍大きなため息だった。

「……アンタはいつもアンタなんだなと思っただけよ」

どういう意味なのか全く理解できない上条は、頭に大きなハテナマークを浮かべている。

「おい、何が言いたいんだお前は。はっきり言え」

「で、アンタは追いかけて、どうするの？ またどっかの誰かさんの為にボランティア活動に勤しむ訳？」

あからさまに上条を無視する美琴。しかし、声には微塵もふざけた様子はなかった。

「……そうかもな」

言葉を濁す。

「だったら、アンタには教えない。悪いけどここで止めさせて貰うわ」

「……どうして？」

「アンタは知り合いだろうが他人だろうが救いを求められたら誰であらうと絶対に助ける、私には到底出来ない芸当ね。でもね、私に

だって似たような思いはある——」

よりいっそう強い口調で、美琴は言う。

「——アンタみたいに無闇やたらとじゃないけど、私だって困っている人を助けたいのよ」

上条は息を飲む。

「たった今ここで危険に巻き込まれて行く人を黙って見過ごせるほど、私は人間捨ててない」

それに、と美琴はさらに言葉を紡いでいく。

「アンタに助けられた時の借り、不本意だけど返さないといけないし。ほら、アンタが死んじゃったなら本末転倒でしょ？」

強いかと思ったら、途端に軽い口調に戻っていた。確かに正論かもしれない。オレは——。

パチパチ

と、突拍子もないかつ場にそぐわない不相応な効果音が響く。

上条と美琴が同時に振り向いた先に見えたのは、たった一人で笑って拍手をしているピアスだらけ銀髪。

笑い声こそ上げず、ただこちらを見つめていた。まるで、大好きな昆虫を観察していたら面白い習性を発見して密かに喜んでいる子供のようであった。

「いやあ、全く持ってその通りなんだって話。さすがは超能力者（レベル5）といったところか」

銀髪は、不可解な笑みを漏らしながらどんどん近づいて来る。

「話を盗み聞きしてた訳ではないんだが、実はオレもアンタを止めるのに賛成だ」

ふと、何を思ったかは知らないが、上条達から数十メートル離れた地点で立ち止まる銀髪。

「オレはね、そいつ同様、アンタには危険な事に巻き込まれて欲しくないって話」

何なんだ、コイツ……。明らかに人を助ける雰囲気じゃない。むしろ、この殺気じみたプレッシャーは一体何だ。まるで、喉元に刃物を突き付けられて一步も動けない状態のようだ。自然と足がすくんでしまう。

「何者だ？　って聞きたそうな顔だが、悪いがノーコメントで」

「く、そ！」

「気分悪そうだな。大丈夫か？」

故意に上条達を挑発し相手に激情させようという目論見は明白なのだが、いかんせんこちらはプレッシャーにやられているので、ただでさえ口を動かす事もできないのに反論など出来るはずもない。それを分かかってやってやっているのなら、この目の前にいるヤツは完璧に自分達を殺す気なのだろう、と上条はフラフラをする頭を必死に回転させる。

「テメエに、言われる筋合いは、ねえよ」

上条が言い放つ。

「バテバテじゃねえかよ。まったく、アイツ、手は出さねえって言った先からもう既に、手エ出してんじゃねえか。数秒前も覚えてないとか鳥の知能以下だぞ、あのクソガキが」

後で粉々に廃棄^{スクラップ}してやる、と銀髪の男は呟く。

「でもまあ、関係ねえか。オレのやる事は変わらねえ訳だし」

不敵とも不快とも言い変えられる笑みを、寸分も崩さずに男は続ける。

氷りつくこの場で、一切の音響^{アクション}さえも取り残されている状況の中、今の二人には行動はおろか発言すら不可能になっていた。

薄れる意識、ふらつく足元、痺れる舌。

そして、目の前に佇む能力者。

「テメエ、何を、しやがった……！」

「ああん？ 別にオレは何もしてねえつつの。それに解説はオレの専門じゃねーし。それでも聞きたきや時雨シグレにでも頼みな。つつても、面識ねえか。あ、この場合ユーゼの方がいいのか？ ま、どっちでもいいか」

「……テメエ」

「何、キレてんの？ 嫌だねえ全く。最近のクソガキはキレやすいつて話。反吐が出る。……ああ！ そゆ事か。アイツね。アイツなら、まだ大丈夫っぽかったぜ。もつとも、最初から少しばかり壊れちまってたがな」

「何を、した」

「だから、別に何もしてねえつつの。何度も言わせんな」

「ふざけんじゃ、ねえよ……！ しらを切んのも、大概にしやがれ……！ アイツに、何をした！」

怒りが全身を駆け巡り、そして上条当麻という一人の人間を無理やり動かす。

絶えず鼓動するこの心臓は、何もまだ完全に壊れた訳ではないのだ。

手は動くし、拳は握れる。足だってまだ、踏み出せる！

身体が軋もうが、芯は少しも揺るがない。
否、揺るぐはしない。

「あのさあ、オレの言葉、ちゃんと理解してるか？　な・に・も・し・て・な・い、って言ってるんだろが。いい加減面倒なんだよ、こんな事しに來た訳じゃねえんだって話」

「黙れよ、オレの質問に答えやがれ……！」

「おまえさ——」

「答えろ！」

一步、また一步と懸命に足を動かし、少しずつ近づいて行く。
距離は数メートル、武器はなし、邪魔もない。まだ少しダルいが、十分いける。

と、踏み出した刹那。

「……テメエ、マヂいい加減にしろ」

寸前にまで込み上がって来る吐瀉物を抑えるのが限界だった。喋ろうと口を動かす事すらままならない。崩れ落ちそうな身体を何と

かそのままの状態に保つだけで精一杯。

襲撃者は、告げる。

「さつてと、ようやく静まったところで本題に入るぜ。単刀直入に言う。お前、死ねや」

幻想殺し

上条は、そのセリフを最後まで聞き取る事は出来なかった。

なぜならば。

既に殺しの一手は上条の下へ、確実に必殺するが如く迫っていたからだ。

言葉の間、ふいに左側に違和感を感じる。

確認する暇もなく、唐突に左側の人体が余すところなく金属バットで殴られたような痛みに覆われる。

とどめと言わんばかりに左上半身と空気の間で火花の散らない静かな、しかしダイナマイト級の威力を有に超えると言っても過言ではない、静寂なる爆発が巻き起こる。

上条の全身に鈍い衝撃が走る。

重量のかかった何かが自分の身体にぶち当たったような感覚を味わいつつ、新幹線のように横一線に吹き飛ぶ上条。正に直線を描くように、寸分のズレもない完全なるライナー球。

さらにその速さも半端ない。時速150キロオーバーはいっているだろうスピードで見事なフライを決めつけている上条の服は、その余りの速さにわずかながら発火現象を起こしている。

そして、軌道上にある電線や壁を玉砕しながら、地面スレスレの超低空をものすごいスピードで滑空していく。

数十メートル先に位置する常盤台中学女子寮の特殊ガラス製ドアに叩き付けられてようやく、上条の飛行は勢いを無くし強制的に止まる。

言葉を発してから爆発が起こるまで、わずか一秒足らずの瞬時の出来事。

ピキッ、とわずかだが学園都市最硬を誇るはずの強化ガラスに亀裂が走る。

美琴はその凄まじい光景を、ただただ啞然と眺めていた。否、眺める事しか出来なかったと言っても差し支えないだろう。余波で起こる爆風が、妙に目に沁みていた。

一方、衝撃で意識がシャットダウンしかけ、しかし何とか手をつきながら上条は戦場へのログインを果たす。

「ほらほらほらあ！ 鬼さんこちらあ、向かなきゃ死ぬぜエ！」

元々の距離プラス吹き飛ばされた時に出来た距離は並大抵の長さではない。しかし、上条が息を吐く事すらままならない程の極わずかな時間の中、銀髪的能力者は瞬間的に距離をつめて来る。

頭を上げるもうその時には、既に視界いっぱい広がる死が迫っていた。

攻撃を避ける事も、防御体制を取る事すらも、問答無用で遅過ぎた。

（や、ばい…！）

思考するも、時すでに遅し。

一時的に、地獄がどのようなモノであるかを体験した気分になった。

今さらながら、痛感する。

「ほおら、よッ！」

声が響いた。

今回の攻撃は何の変哲もないただの蹴り。爆発も連打のような痛みもない。形は至って普通のハイキック。能力者の攻撃というより、単なる喧嘩殺法に近い低レベルな攻撃であった。

しかしそれは動作モーションの速度を除いた話。

異常なまでの助走と異質なほどの動作の速度が絶妙に相まって、ただの上段蹴りに絶大な威力を生む。

通常ならば相手を後ろ側に倒す程度の威力しか持たないが、この場合の威力は数十センチのコンクリートを軽くぶち抜くほどの威力を持っていた。下手をすると人体を五臓六腑ごとぶち抜けるかもしれない。

ここで、問題。

通常、何の能力ももたない無能力者であるところの一般市民が、防御もとらず真正面からこの一撃を受けてしまったらどうなるか？否、原形を保っていられるだろうか？必然、答えは決まっている。

人体の無変化など限りなく不可能。

ドゴォ、と轟音が鳴り響く。

常盤台中学の正門であるところの特殊強化ガラス製のドアは、亀裂の中心部から円を描くようにひびが一斉に走り抜け、そしてわずか一秒も持たずに粉々に砕け散る。飛び散ったガラスの破片が寮内の赤いカーペットに深々と突き刺さり、その上を赤き肉塊が転がっ

ていく。

赤黒く滲みポタポタとその色を滴らせながら、ソレは転がっていた。

「ひっ——」

一部始終を見ていた美琴は、小さく悲鳴を上げた。ドアに突き刺さっていた右足を抜いている青年は、ぐると首だけ動かしてこちらを見やる。

美琴はそれにも気付かずあるいは気付いているが視界に入らないといった感じで、ただ呆然と呟くのみだった。

「あ、あん、た……？」

「……死んでるよ。感触あったし、何しろこの血が証明してくれている。味は本物のそれだ。まあそんなことはどうでもいい」

口元を邪悪に歪めながら、殺人鬼は笑う。

「次はテメエだぜ？ 超電磁砲^{レールガン}。あっさり敗北してくれるなよ？ 仮にも超能力者（レベル5）なんだから、それなりに抵抗してくれないと殺りがいねえからな」

「……」

美琴は答えなかった。

「おいおい、殺し合いどころか会話にもならねえじゃねえか。もう廃人コースに入ってるのかよテメエ。しっかりしてくれ、レールガンさまよ」

しかし、それでも美琴は黙ったまま地面に俯いていた。

「いい加減にしろよ？」

挑発は無意味を物語った。

そうして事を終えた殺人鬼は、再び動けない獲物へ牙を剥く。

「無視すんなよ、廃人がアア！」

咆哮が轟く。

放心状態のように見える美琴に向けて数十メートルの距離をまたもや一気に縮めようと、足を構える。

直後。

「まあ！ お姉様でも可愛らしい声を出せるのですね、黒子感心致しましたわあ」

シリアスな雰囲気を経々とぶち壊すその台詞とともに、美琴の座りこんでいるすぐ隣に後輩の白井黒子が何処からともなく湧いて出てきた。というよりテレポートして来た。

「……ぷはっ！ あー苦しかった。黒子、アレ演技よ、え・ん・ぎ！ それよりアイツは……」

さっきとはうって変わって態度が明らかに違う美琴。

「ええ、大丈夫ですわよ。あの類人え…殿方ならテキトーな場所に移動しておきました。幸い、左肩の軽度の脱臼以外目立った怪我はありませんで——」

「余所見する暇があんなら、地獄に持っていく土産でも用意しなァァ！」

突然の舞台登場にさほどの驚きも見せず、完全に我を失っている銀髪の青年は少し遅れて叫びながら飛び出す。

やはり、目では追えなかった。

テレポーターも目を剥きだして驚くほどのスピード。

もはや、超高速移動というより一瞬で現れるテレポートに近い。

距離は一気に縮まって、あと数メートルという間隔の時。

しかし、迫ってくる脅威をものともせず、空間移動テレポートの能力者は微

笑んだ。

「殺人鬼さん、土産の用意は貴方のほうでは？」

今さらハツタリか、と少々虫酸が走った。

どうやったってハツタリはこの状況に適さないはず。しかし相手はそれをやつてのけている。なぜ？

若干の違和感を感じたが、すぐに廃人の愉快な喜劇と決定づけた。

「はっ！ 笑えねえ冗談は嫌いだぜ！！」

残るは数センチ。

眼前には整った顔立ちのツインテールの少女。手を伸ばせばすぐにだって肉塊に変えられる人体。

足を大きく後ろへ回したその時、声が聞こえた。

「前方ばかり気にしていると小石に躓いてしまいますわよ？」
イマジンプレイカー

全く避けようとしないう白井に対して、青年は寸分の疑いもなく拳を振るう。

拳の間からわずかな隙間が出来、そこから白井の顔が窺うかがえた。

その顔は笑っていた。

それとほぼ同時に左側から、足を踏み切り風を裂く音が鼓膜に響く。

「うおおおおお オオオオオオオオオオオオツツ！！！」

咆哮が聞こえ、そしてそれが何なのか認識する間もなく左頬に鈍い痛みが走る。

「グ、ハツ！」

上条当麻。
イマジンプレイカー
幻想殺し。

殴られたのだ、と理解するにはわざわざ時間を要した。

しかし次の瞬間には自分を殴り飛ばした上条に意識を傾けていた。

「ツ」

殴られ後方に倒れ込むのを左足で抑え、その直後には相手を確認もせず、右腕を振るっていた。

後方にある左足を軸にして遠心力を加えた右ストレートが相手に向かつて放たれる。

しかし、ほとぼし右腕が相手を貫くその瞬間に右脇腹の痛覚に別の鋭い衝動が迸った。

「——ッガアアアアアアアアアアアアアアアツツ！」

美琴の放った雷撃の槍。

銀髪の青年に白光で光り輝く雷撃の槍が腹部にかけて直撃し、その膨大なエネルギーにより弾け飛ぶようにして吹き飛ばされる。青年は地面に数回叩き付けられそれでも勢いは緩まず、常盤台寮の正門を破壊しそのまま階段に打ち付けられた所で制止するだけの制動を得た。

「お姉様までする事はなかったのですけれど、まあそこは成り行き状そうなっちゃいましたわね。さてその殺人鬼さん、器物損害およびに殺人未遂により拘束致します」

白井は、階段にもたれ掛かっている青年に向けてそう言い放ちながら少しずつ詰め寄って行く。手の中に手錠らしき物の姿がちらちらと見え隠れし、一連の事件の犯人がこいつだったのだ、と感慨深くもしみじみ痛感した。同時に安心してしまったのか安堵の息を漏らす上条。

今回、学園都市において初めてとなったこの連続殺人事件。今までにもこれと似つかわしい出来事がなかった訳ではないが、この殺人は主として学園都市の理事会役員を狙ったものであり、加えてほぼ100パーセントの死亡率を記録している。動機やら詳細やら犯人やらは一切不明ではあるが、学園都市を根底から潰す、という目的の下に行われているという事は明白だった。

しかし、これに対してあの統括理事会が黙っているはずがない。

統括理事会を大きく揺さぶるにまで至らしめた前代未聞、空前絶後の大いなるスキャンダルは理事会の早急かつ適切な事件解決という方針に基づき例外的特殊ケースという建前、アンチスキル ジャッジメント警備員や風紀委員をフル動員し、全監視カメラ24時間体制のノンストップ稼動、スクールおよびにオフィスのセキュリティ全面向上に加え、外部からの通信手段オールシャットダウンなど、通常の警戒体勢から大きく逸脱した動きを見せた。しかし、それはあくまで舞台裏での動きで、表には出さずに裏方で内密に行っていたのも紛れもない事実。要約するならば、アンチスキルやジャッジメントでもない限りこの秘密裏の動きは知り得ないという事である。

ゆえに、ジャッジメント風紀委員である白井黒子がジャストミートでこの場面に登場するのは目下当然の事なのであった。

「殿方さん、ご協力感謝致しますわ。けれど、あくまで犯人逮捕のこの功績はお姉様のものである事をお忘れなく。そこら辺重々理解して頂けると幸いですわ。まあ百歩譲ってお姉様の『お手伝い』という事で殿方さんが活躍したと言うなら、この功績の1／100（ヒャクブンノイチ）くらいは殿方のものである認めてさしあげてもいいですけれど。ふふん、喜んでいいですわよ殿方さん？ 自慢する事を特別に許可してあげたのですから」

その件のジャッジメントは、顔も見ずに協力者というかむしろ被害者に近い上条に向かってまるで感謝していないような棒読みかつ冷たい声で言う。台詞のあいまいさに「…類人猿ごときめ…類人猿ごときめ…いつか殺す…」と黒い呟きが聞こえてくるのは錯覚だと信じたい。

「言動と声音が全く一致してねえぞ…。つーか、少しは怪我人を労いたわろうとか労ねぎらおうとか介抱してやろうとか思わないのですかつ、こ

の薄情者共めっ！」

「^{いた}労わると^{ねぎら}労うという漢字は全く同じなんだあー、小説ならここでルビ入るんだろうなー、と的外れもいいとこな事を思った上条であった。」

「なんで私まで言われなくちゃいけない訳！？ だいたい、この件についてはアンタが勝手に突っ走って勝手に怪我したからいけないんでしょうが！ 完膚無きまでに自業自得じゃないのよ！ よくよく考えれば、アンタいつもそんな感じで病院送りになってんじゃない。近い将来、絶対に身を滅ぼすわね、アンタ」

「医者でもねえくせに上条さんの余命宣告すんな！ ついでに言っちゃえば、今回ばかりは上条さんは巻き込まれた側だもんね！ 完全無欠な被害者なんだもんね！ 人を、超大型台風接近中ただちに向かいます！、みたいなノリのお祭り野郎とか思ってたんじゃないぞ、コルアア！」

怒鳴り声を上げて意味不明な例えを出しつつ年下相手にガチでキレるという、奇妙で器用で大人げないアクションをいとも簡単にやってのける上条。ちなみに、その例えの意味は本人にも理解できない。

「あの実験があった後にそんな事言われても説得力のカケラもないのよ！ 今思えば、あれって究極的に言っちゃうと、壮大なるただのお節介でしかないのよね。それも、命をかけるほどの」

「し、しまった。否定できない……」

「どんだけあの病院が好きなのよ、アンタは。もしかしてドM？」

上条との間合いをじりじりと図りながら、かなり引き気味の様子で問う美琴。その、上条を見る目は真正銘死んでいた。

「待て待て待て上条さんは新生のドM体質に目覚めたりなんかしてないから覚醒する予定も上条スケジュールに組み込まれてないからお願いだからその腐った魚を見るような目でオレを見ないでええー！」

何故だか上条は身悶えし始めて、それを見る美琴はなんとも表現を控えた方がよさそうな顔をしていて、白井は殺人鬼には目もくれず完全に心ここにあらずといった感じで、

「…ええ、ええ、そうなんでしたの、姉様は命をかけるほどの困難に会ったにも関わらずこの黒子に頼らずあの気色の悪い低能丸出しヤローに身も心も委ねてしまわれたと、そういう訳ですの、あーらおかしい急に殺る気が湧いてきましたわよ？おほほほ…」

と、負のオーラを全身漏れなく撒き散らしていた。

一見おかしな光景ではあるが、上条の日常においてこれはほとんど日常茶飯事での事であり、何ら異常な事態ではない。

しかし、それはこの状況を除いて、の話。

今、現時点をもって明らかな異常因子がただひとつ存在する。

言わずとも知れている。
氷河気炎。

「調子に乗ってンじゃねえぞクソ野郎がアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！！」

刹那。

会談に倒れ掛かっているはずの氷河の姿が消えた。
同時に、この常盤台中学女子寮の玄関に位置する壁、天井、ガラス窓、インターフォン、電灯、それら全てが一瞬にして姿を消す。

ひとつの爆風によって。

ドゴオオオオオオオオオオ！！ と、轟音が学園都市に響いた。

玄関の中心から、まるで台風のように風が一気に巻き起こり、周

りの遮蔽物全てを薙ぎ倒しながら吹き抜ける。一瞬の内に、強化ガラスは粉々に砕け、壁はミシミシと軋み、天井は上一直線に突き抜けた。

地震のような地鳴りが常盤台中学女子寮を揺さぶる。

何処からともなく、寮内に悲鳴が響き渡る。これが誰の声であったかは定かではない。

婚后光子こんこうみつこの声であったか、湾内絹保わんないきぬほの声であったか、泡浮万彬あわつきまあやの声であったか、もしかしたら寮監であったかもしれない。いずれにしても、その悲鳴は誰の耳にも届かなかっただろう。例えば彼女らの知人である白井黒子や御坂美琴であっても。

爆風は容赦なくその建物ごと根こそぎにし、青年は崩れゆく中で静かに燻っていた。

正に絵に描いたかのような崩壊だった。

「なあに勝手に話進めちゃってる訳エ？　こちとら、ノックアウトしたつもりはさらさらねえんですけど」

崩壊はなおも続く中、その爆風の中心に立っている少年は何処かに必ずいるであろう上条達に向かって喋りかける。

「イマジンプレイカーレイカ レールガン
幻想殺しと超電磁砲、その他一匹。ズイブンと嘗めた態度じゃ

ねえかよ、クソ共が。素直に殺られてりゃあ、お前らも墓ん中に入るくらいの原形は保ってられたかもしれないねえのによお——」

瓦礫が渦巻くこの空間では、彼らの生死すらも不明。しかしそれでも青年は、そんなことなどどうでもよさげに、その舌を止めようとはしなかった。

否、青年には彼らの生死が分かっていた。

これくらいで死ぬようなヤツではない、と。

アイツらは必ず生きている、と。

確認する事もなく、青年は砕けた笑みを浮かべながら思う。

何の根拠もないが、青年には確信を持ってそう断言することが出来た。

そうならざる得ない理由が、青年の中にはある。

だって、オレが、この手で、殺すのだから。

「——悪いが、五体満足で死ぬると思うなよ。臓器臓物神経血管、何ひとつ残してやるつもりはない。殺るからには——」

青年は、目を開いた。

「――粉微塵だ――」

氷河気炎

「(な、！！！)」

白井は青年が咆哮するその一瞬を見逃さなかった。
否、目を逸らす事が出来なかった。

白井は元々、その直後に訪れる爆風に対してあらかじめ察知していたという訳ではない。かといって、実際に青年が何らかのアクションを起こす兆しを直感していた訳でもない。もし、それらのひとつでも彼女が感づいていれば、あるいは、もっと単純に明確に、自分ひとりだけが回避体制に入らずとも、誰一人傷付く事のない最良にして最善たる選択が出来たかもしれない。

しかし、白井には察知も直感もしなかったにも関わらず、青年の攻撃が明確に予測出来た。

脳裏に直接浮かぶ、最低最悪のビジョン。

背筋に走る、電撃的な悪寒。

そして、喉元を締め付けられているかのような鈍い感覚。

頭が、脳が、それを理解していたのではない。身体が、それを鮮明に如実に感じ取っていた。

目の前に映る絶対的なモノに決して関与してはいけな、と。

通常の『感じる』という感覚とは異なる身の危険を感じた時にのみ起こる、誰もが持つ極めて原始的な人体の最終防衛ラインの『感じる』という感覚。

つまり『反射』である。頭で理解して腕を動かすのではなく、

身体が感じてそのまま直接腕を動かす。脳へ感覚を伝える神経の線路が、直接運動器官へと渡るように軌道を変える。

その時の白井には、そのような突発的な直感に頼る以外に道は残されていなかった。

白井が感じたものは、紛れもない純粹に純真に嘘偽りのない完全なる、殺意。

それを自覚した時、白井は全身の震えが止まらなかった。

反撃や迎撃などもはや蚊帳の外。ましてや上条と美琴にすべきだった逃げの一手すらも脳裏に通りすらしない。ただ頭にあるのは、逃走の一言だけ。逃げるための手段だけ。もはや美琴や上条に庇うだけの余裕がないほどに、白井は恐怖していた。

その時、白井の中で何かが音を立てて崩れ去った。マニュアルにあった順序が頭の中できると半回転して、優先順位をことごとく破壊していく。

気が付けば、白井の身体は理性を離れ勝手に動き出し、眼前で天を仰ぐようにしてケタケタと嘲笑う青年に対して背を向けていた。

「（逃げなきゃ、逃げなきゃ殺られる。逃げなきゃ、殺られる！）」

だからといって、走って逃げられる訳がない。きっとアイツは追いつく。どんなに逃げてもアイツからは逃げられない。そんな錯覚が頭を支配する。

「643164632758264……く、4613413419
9119……くそっ、ダメですの」

焦って計算が上手く出来ない。早く早くと思う反面、恐怖感が脳内にじわじわと募り余計に計算を狂わせる。

「・・・261ww6182.」
「6k103——ッ！くそッ！ですの！」

必死に手を動かし自分に触れようとするが、腕が痙攣して動かす事もままならない。

「6／13@47di0.w.0mw,mngm813622||
314「2#81」59#6489#704##600——（早く、早く!）」

それでも乱雑に腕を振り回す。思考が反転し恐怖に対して明確に脅えているのが白井にはわかった。

「561「6161163」63—333..318101／0／8
8.8.888.821845888,||5616||62090
002000200##022#——（殺られる）——」

指先が微かに触れても、テレポート空間移動演算が合わず発動しない。

何故？

なんで？

計算が合わない？

いや。

来ないで。

誰か。

助けて。

「235#「00526」..9a||dgJg||4246186／／

162, 3641j75, 111126502#002#00
02#00002#002##2002##
0000002222220000000000
000000002222220000000000
あああああ「ああああああああああああああああああああ

頭の中が真っ白になった。演算はおろか、動くことすらままならない。

ただ、背中から伝わるこの感覚だけはわかった。それ感じ取つてもなお、ただ叫び声を上げるしか出来なかった。

「みっともねえんだっつもの！ ああ、くそっ！ ゴミ風情がっ！」

滴る血を拭いもせず、白濁とした瞳で白井を見る。叫んでいた白井は怒鳴り声に、びくつ、とわずかに震え、叫びが止まった。

[illegible]

瞬間、青年の足元から爆風が巻き起こる。

音速の如き速度で一氣に白井との間合いを詰める。そして耳元で呟いた。

「オメエ、髪一本残ると思うな」

振り上げた左腕で止めの一手が撃たれた。

しかし。

「ッオメエが調子に乗るなッアアアアアア！」

青年の声を糾弾するような形で放たれる怒号。

直後に青年の背中の数センチ後ろで一筋の閃光が空を切り、軌道上で旋風が舞う。

「……」

「――え？――」

白井は今日にした光景が信じられず、感嘆と疑問の入り交じった複雑な言葉を口にする。

それに対し、青年は閃光の発信源を一瞥。

気付けば、青年はあと数センチで白井に届くというギリギリの位置で腕を止めていた。いや止めていたというよりは『止めざるを得なかった』と表現した方が、あるいは正しかったかもしれない。

背後を突き抜けた閃光が、次の行動への抑止力として作用したためだ。

レールガンとの距離は数メートル。この距離感で攻撃を外すということは、単なる射撃ミスとして片付けるにはあまりに不十分。つまりこれは明確な威嚇行為と見て間違いない。そして、同時にそれは相手に対しての絶対的な優位を提示する意を持つ。

このオレに対しての。

「……へえ」

心底感服したようでいてどこか蔑んでいるかのような口調で青年は言う。

「やりやあできんじゃん。」

「ナメるな。私はレベル5の第三位。あんた程度じゃ相手にすらならないのよ。わかった？」

閃光の先には、右手にコインを持ち不適な笑みを浮かべる御坂美琴が燦然と立っていた。

身体中かすり傷だらけだが、その顔から余裕の表情は消えていない。

「ナメてんのはお前の方だろうが。つかよ、逆に聞くがお前今の状況わかってる？」

「ええ、もちろん。あんたの死亡フラグがたつたって場面でしょ？」

肩は少しばかり上がっているにも関わらず挑発する声は止まらない。

「はあ？ ……ああ、なるほどなるほど。オッケーオッケー、理解した。つまり余程死にたいらしいなレールガン。安心しろ、跡形もなく消してやるから」

「言ってる狂者。その保証はあんた自身にすべきでしょう。ついでに言っとくけど、アンタもう死亡ルート確定。CG回避は不可よ」
声は止まらない。

「オッケー、今すぐ殺してや、——」

青年が振り向く瞬間に、二度目の閃光が空を裂く。

「誰が動いていいって言った？」

その頬には、旋風による余波で切り裂かれた傷が出来、ドロリとした血が伝っていた。

「デメエ……………」

「三流ね。逆上もいいけど冷静に状況を把握出来ないんじゃ、そのうちそこらへんのザコに足元掬われるわよアンタ」

「クソがッ！」

気休め。

あるいは時間稼ぎ。

そして、今美琴ができる最善の策でもあった。

アイツの能力は現時点において未だ不明。爆風や驚異的な速度から考察するに、レベル4の風圧操作と推察出来るが断定は出来ない。エアロシユーターしかし、仮に風圧操作であったと仮定してこの状況の打開策の有無について問われたのなら、安易に有の意を示すのはいささか思慮が浅いというものだ。彼一人ならば何も問題はない。だが、彼が一人であるとも限らない。ビルの中に、瓦礫の下に、背後に。いないなどとは言い切れない。

推定から断定は出来ない。

ならば、する事は一つに限られる。
情報が少ないのであれば、増やすまで。

「やるしか、ないわよねッッ!!」

左手でコインを弾き、右手に全能力を集中させる。

「クソがッッアアアアアアアアアアアア!!」

彼が動き出すその瞬間とコインと彼が一直線上に並んだのは、ほとんど同時だった。それを認知する頃には、既に右手は真っ正面へ向けて拳を放つように突き出されていた。

「終わりよッ!」

コイン内の磁界に超高圧の電気が流し込まれ、電磁誘導による加速が刹那的速度で完了する。高速から音速へと、変換されるまでに要する時間は一秒にも満たなかった。

右手から撃ち出される閃光。

一度目、二度目よりもはるかに速い速度で。

速度に変換されなかった運動エネルギーは暴発し、爆風としてその力を周囲に向けて拡散する。拡散された力だけで半径一メートル以内のコンクリート製の地面を優に削り取っていた。

余波だけでさえこれだけのエネルギー。主砲の威力など到底計り

知れる訳がない、というのが彼の第一感想だった。

億を越える電圧を帯びてフレミングの法則をなぞるようにして生産された力でまるで弾け飛ぶように放たれたレールガンは、光の如き勢いを成し軌道上にあるものを粉々に砕く。

音速。

音が消えていた。

美琴が放ち彼に直撃する間、彼にとってはそのわずか数秒間が永遠のように感じられた。切り詰めて言えば、リアルな死を思ったのだ。左右への退避は不可。平面的な回避は不能。立体的な回避も有効どころか逆に自殺行為。第一、視認してからの回避自体が不可能なのだ。音速を視覚的に捉える前提の回避など言語道断。

つまり四面楚歌。

逃げ場は、ない。

「……ッ……」

電撃が身体中を駆け巡ったかのような感覚に、脳が痺れる。しかしそれは不思議と嫌な気分ではなかった。いや、むしろ全く逆の気分にする感じる。やがてそれは彼にとっての明確な快感へと変わっていく。

「（…そうだ。…これだ、これなんだよッ！）」

戦闘における緊張感。張り詰める戦慄に打ち震え、痺れ、全身が凍る。その中にこそ彼が望んでいたものはある。

口元が自然と緩む。

さっきまで胸中を支配していた超電磁砲レールガンに対しての憤怒はとっくに消滅し代替的に、『至福』、という、この状況にそぐわない感情

が彼の胸を占めていた。

彼は動く。

音速で迫るレールガンに対し、彼が取った行動は極単純でシンプルなものだった。いや、というより彼は迫り来るレールガンに向けて、美琴が撃ち出す以前から取るべき行動を最初から行っていたのだ。

回避は出来ない。

しかし防御が出来ないとは限らない。単純に考えて、彼がレールガンを防ぐことは彼にしてみれば雑作もないことなのだから。

つまり最初から行動は決まっていた。

それでも、実際に目の当たりにした全力のレールガンには恐るるに足る、殺意があった。それに恐怖を感じるのは当然の事。有り体に言ってしまうえば、彼が憤怒の感情から歓喜の感情へと変化したことはただの余興以外の何物でもない。

しかし。

それは氷河気炎が確実な殺意を持って本気を示したのと同義であった。

「アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

聴覚に響かない叫び。

それは当たり前のように、美琴の耳にも届いてはいなかった。

音速のコインは既に彼の眼前に迫っていた。

ただ彼は、最初から決まっていた動作のように、全てを薙ぎ落とすかのように、さながら幻想殺し（イマジンブレイカー）のように、右手だけを目の前に向けていた。

彼は右手だけで、レールガン超電磁砲に挑んでいた。

推定マッハ5。威力測定不能。

しかし、それは破壊力だけを切り詰めて観た場合の話。彼にとっての障害、ましてや脅威にはならなかった。

直後、轟音が鳴り響く。

しかし爆風は巻き起こらなかった。

余波の粉塵は宙に舞うこともなく、まして大地が削り取られているような事すら起こらなかった。

美琴は目の前に繰り広げられた光景を、ただ呆然と傍観し、そして圧倒されていた。

レールガン超電磁砲は確実に直撃した。

それは確かだ。しっかりとこの目で見たのだから。

発射してから一時も彼から目を離していなかったのだから。

絶対的な速度も持って全力の一撃を放ったつもりだ。音速だ。音を超えているのだ。

外れる確率など、一割どころか一パーセントすら許さない。

レールガン超電磁砲は確実に当たっていた。

レールガン超電磁砲は絶対的な速度を持っていた。

超電磁砲レールガンは最大にして最高の破壊力であった。

それでも。

超電磁砲レールガンは彼を倒すには至らなかった。

静かに、凍てつくように、電磁波を帯びたコインは空中に制止していた。

「……何、よ、これ……」

彼の右手から透明な柱が忽然と姿を現し、コインを飲み込むように包みこんでいた。

「残念、でしたねえ」

半径一メートル弱のそれは幾重にも張り巡らされた円状の結界のように見えた。超電磁砲レールガンに対して垂直に並び、波状の振動を起こすが如くコインは円形の結界の中央へと吸収されていた。透明にヒビが入ったかのような結界は、一つ一つの結界が個々の役割を担っているのではなく反対に中央部分で接合されて強度により強い防御性を与えている。超電磁砲レールガンは一段目を碎き、二段目三段目と粉碎し、五段目に激突したところで勢いを失っていた。

一段目にぶつかったところで極わずかな制動を得、円形による波動の分散で中央からの威力を少しづつ減少させる。中央の接合部を貫くことによって徐々に力を損失させ、そして再び結界による制動と力の拡散。

そして、最終的に音速の超電磁砲レールガンを止める結果となった。

「おいおい。テメエの本気ってこの程度？　…嘘、マジで？　第三位の超電磁砲様も堕ちたもんだねエ。ギャハハ」

事態の処理能力が追いつかずしばし硬直する美琴に、結界の最深部から彼は嘲るように言う。

「——こんなもんじゃねえだろ？」

美琴の悪寒が走る。

「まだ、まだまだ、こんなじゃねえだろ？　この程度じゃ終わらねえよな？」

上げていた右手を下し、言葉を紡ぐ。

右手を下した瞬間に透明な円柱は音もなく決壊し空気上へと消えて行った。

「ヤベエよ、テンションがおかしくなっちゃった。楽しくて楽しくて仕方ねえ。ギャハハハハハハ！」

壊れた笑みを浮かべ、右手と左手で大袈裟に宙を仰ぐ。
そして彼は言った。

「いいねえ！　いいよ！　最高にいいよお前エ！　滅茶苦茶楽しいじゃねえかよオオ！」

「やりやあできんじゃねえかッ！　それでいいんだよッ！　それが一番正しいんだよオオ！！」

「ああああ!! サイツコー!! ようやく楽しくなってきた!!」

「来いよ来やがれよ、こんなじゃ全然足りねえんだっつゝ話なんだよッ!!」

「もつとだもつと！ 足りねえ！！ 満たされねえよッ！！」

「もっと全力で来いよ、全力で殺しに来いよツツ!!」

「そしたらオレも殺してやるよ。お前をぐちゃぐちゃにしてやるよ粉々にしてやるよ」

「アタマがオカシクなるほど殺してやるよ」

「殺し死ぬまで殺し尽くしてやるよ」

「カタチが無くなるまで殺しまくってやるよ」

[illegible]

途中から彼の言葉に吐き気を催した。聞いていて不快だった。

コイツから一刻も早く離れるべきだったと今更思う。対抗しようと思ったこと自体が間違いだっただの。アイツの能力とか、力量とか、それ以前に。まずは逃げるべきだったのだ。きっかけはいくらでもあった。黒子が来た時点で、瓦礫に埋まっている上条を連れて真っ先に背中を向けるべきだったのだ。しかし私はそれをしなかった。闘う事を選んだ。選んでしまったのだ。これほどまで後悔する

とは思わなかった。

上条は毎回このような状況下で闘いを強いられていたのだろうか。相手の狂気を直接にぶつけられて、そのうえで自分は相手を下さなければならぬのか。

……自分には全く無理な話だったのだ。
最初から。

「ギャハハハハハハハハハハハハハハハハ——」

まだ負けてはいない。けれど闘う前から既に勝気はなかった。

彼はレベル4の状態変換。ハイドロカスタマー

勝てない道理などない。

それでも勝てない。

それは簡単な事だった。

彼は間違いなく私を殺そうとするからだ。

そして彼は間違いなく私を殺すからだ。

理由などいらない。

彼は、私を、殺す。

そう感じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4675j/>

とある直死の永久機関（エターナル）

2011年10月27日07時48分発行